岡山県津山市沼字松山

沼E遺跡Ⅱ

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第８集

1981

津山市教育委員会

序

近年の考古学の発達ぶりには、目をみはるものがある。従来の文字に閉じ込められていた歴史学の視野を、一気に数十万年のかなたに押し広げつつあるようにみえる。我が国における考古学の隆盛もまた、将来に多くの期待を抱かせるものである。

古くから当市においても、佐良山の中宮１号墳や沼遺跡が発掘調査され、その成果は考古学界における貢献大であったと聞く。われわれがこういった歴史環境に恵まれたことは実に喜ばしいことである。

しかし反面、近年の開発事業の多発状況は、特に地下に埋もれた遺跡の存在条件をややもすれば危うくしている。当市では、この状況に対処すべく最大限の努力をしているのではあるが、開発事業の実施に伴う緊急調査が多発しているのも現実である。沼Ｅ遺跡の調査もこの開発に伴う事前調査の一つであった。

発掘調査により、弥生時代の竪穴住居址や入口の明瞭となった長方形竪穴建物、倉庫などが発見され、美作地方の農業生産開始期の生活実態を解明する多くの手がかりが得られた。

調査にあたっては、地権者田中晴雄氏はじめ各方面から多大な御助力、御指導をいただいた。記して感謝の意を表するとともに、これらの成果を基に近い将来、市民一般を対象とした小冊子を発刊するなどして埋蔵文化財への理解を深めていただくべく努力を続けたいので、今後とも各位の御指導、御助力をお願い申し上げる。

昭和56年3月

津山市教育委員会

教育長　福島　祐一

本　文　目　次

第１章　はじめに
　1　発掘調査にいたるまで……1
　2　遺跡の立地と環境……2
第２章　発掘調査の概要
　1　発掘調査の経過……5
　2　遺構の概要……6
第３章　遺構及び遺物
　1　住居址……8
　2　建物址……23
　3　溝　址……26
　4　墓　址……27
　5　石　器……30
第４章　美作における弥生中期小住居群構造の解明にむけて
　1　小住居群を構成する遺構の検討……32
　2　中期小住居群の構造について……33

※　本書は、畑地造成に先だち津山市教育委員会社会教育課が昭和55年度事業として、55年７月20日から10月31日まで実施した津山市沼Ｅ遺跡南半の発掘調査報告書である。北半については、既に昭和53年11月～54年１月にかけ宅地造成に先だち沼Ｅ遺跡発掘調査委員会により発掘調査され、近日中に報告書刊行の旨である。このため、調査委員会発掘区をⅠとして報告し、本報告をⅡとする。

※　調査経費は、総額土地所有者田中晴雄氏の負担にかかるもので、報告書印刷費は津山市費と田中氏の負担を合わせたものである。印刷費不足額については津山朝日新聞社の格別の御配慮をいただいた。深謝。

※　本書の編集と執筆は、主として中山俊紀があたり、墓址及び石器の項は行田裕美が執筆した。

※　遺構の測量、実測は、中山、行田及び光延稲造があたり、製図は中山と行田がおこなった。遺物実測製図は、土器及び土製品を中山、石器は行田が担当し、安川豊史、光延稲造の助力を得た。

※　石器石質については、岡山理科大学三宅寛教授に肉眼観察による鑑定をいただいた。

※　各図に示した方位はすべて磁北であり、レベル数値は海抜高である。

※　出土遺物及び図面は、津山市二宮の埋蔵文化財整理事務所に保管している。

※　墓址の発見は、毎日新聞社米谷章夫記者によるものである。深謝。

第1章　はじめに

1　発掘調査にいたるまで

昭和54年春、津山市沼在住の田中晴雄氏より、同氏所有の沼字松山の山林約1300㎡を対象に土取り工事をする旨、津山市教育委員会に問い合わせがあった。当該地は、周知の沼E遺跡にあたり、前年秋には北側約2000㎡が宅地造成にともない発掘調査され、多数の遺構が検出された。当然南部分にも濃密に遺構の存在する可能性が強く、現状保存するよう数次にわたり折衝を重ねた。しかし、土取り後宅地化する計画もあって、同氏の意志は固く結局昭和54年度中に遺構の確認調査を実施することとなった。

確認調査は、54年８月６日から８月24日にかけ実施した。当時、対象地南半には大きな木が林立していたため、立木密集部を避け５本の試掘溝を設定し掘り下げをはかった。このため、確認調査は対象地全域の約３分の２をカバーしたにすぎなかったが、弥生時代中期ないしは後期とみられる竪穴式住居址３軒（１、２、３号)、竪穴式住居址と思われる黒色土の落ち込み２箇所（４、５号）を検出した。

この結果をもとに、同氏に再度現状保存を説得したが同氏の意志は変わらず、結局調査費用全額を田中氏が負担することで、昭和55年度に全域を発掘調査することとなった。

なお、調査関係者は次のとおりである。

津山市教育委員会	教育長	福島祐一
	教育次長	下山甃二
	社会教育課長	須江尚志
庶務担当	文化係長	宇那木俊介
	事務員	杉山紀子
発掘調査担当	調査員	中山俊紀
	〃	行田裕美
	調査補助員	光延稲造
	整理技術員	日笠月子

発掘作業員　河井孝止、安東多一郎、松永猪之七、北原義雄、河井洋、光延稲造（立正大学生)、森広琢之（東海大学生)、以上確認調査、北原義雄、二木菅三、鈴木胤一、日笠あさ代、大郷貴美子、以上55年度調査。

なお、高山昭二氏宅には、飲水その他種々お世話になった。全景写真の撮影にあたっては、津山圏域消防本部、中国電力津山電力所岡田文治氏の御協力をいただいた。深謝。

2　遺跡の立地と環境

沼E遺跡は、岡山県津山市沼字松山610-1番地他に所在する。同地は、津山市街地北方約2kmの鳥趾状に延びた低丘陵上に位置し、宮川左岸の水田面からの比高約40mを計る。

この付近一帯は、7～8年前までは農村風景を良く残す閑散な地域であったが、近年は宅地開発の波が徐々に押しよせ、その景観が急変しつつある。

遺跡北方約50mには、昭和27、29、33年の3ヵ年にわたって調査された沼弥生住居址群が存在し、現在教材公園として整備されている。北西 800mには、北陵中学校建設に際し事前調査された弥生後期の集落大田十二社遺跡があり、北方2kmには大規模農道敷設に際し事前調査された弥生中後期の集落紫保井遺跡がある。また、眼下の宮川左岸には区画整理事業の実施に伴い調査された弥生中後期の京免遺跡及び竹ノ下遺跡等が存在する。これら調査されたもの以外にも、付近には弥生式土器片の散布地が丘陵上に点在しており、弥生遺跡の豊富な地域といえよう。

この地域の遺跡の評価については、沼遺跡の調査成果をもとに古く近藤義郎氏がすぐれた見解を発表しており(注1)近年の増大しつつある発掘成果により氏の見通しは実証されつつある。

最近の発掘成果にてらしてみると、この地域が本格的な農業生産を開始したのは、弥生中期中葉を相前後する頃(注2)とみられる。丘陵上に、小遺跡が多く点在するありかたからみて、初期農耕者達は、谷水田の開拓にまずとりかかったとみてよい。従って遺跡の多くは中期後葉以降に集中し発掘もその時期のものが多い。

ところで、沼E遺跡の1次調査では、1例ながら中期中葉の遺構が検出されており、隣接する今次の調査では、この時期の住居群のあり方が解明されることも期待された。

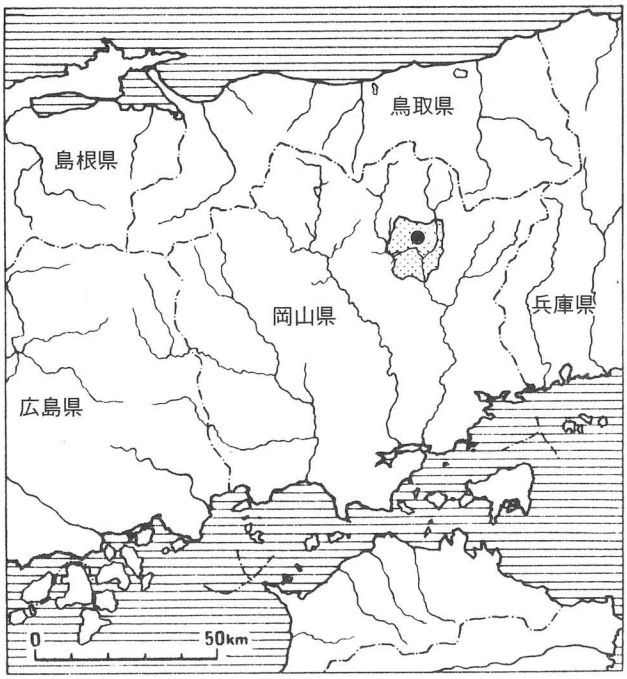
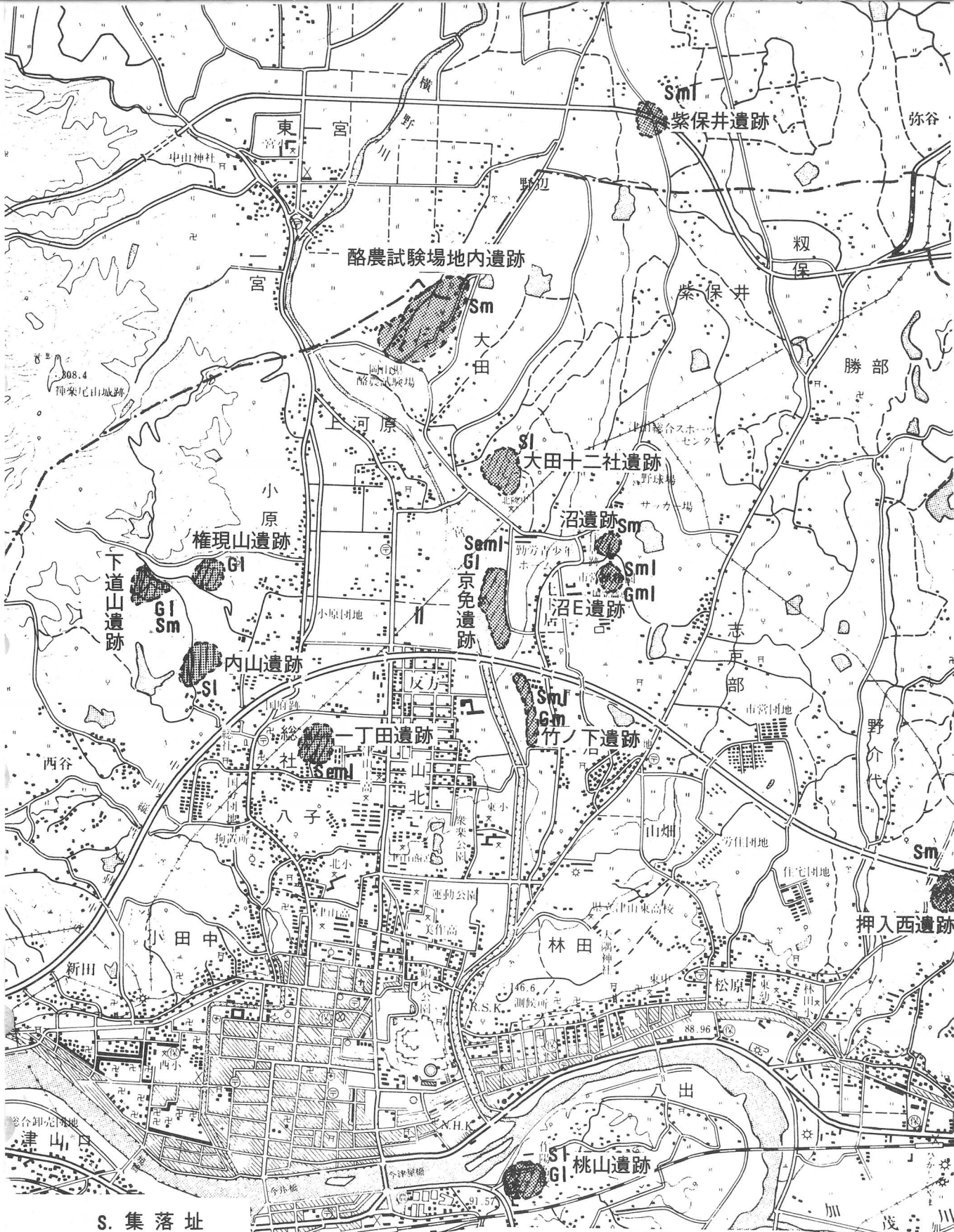


Fig. 1. 沼E遺跡位置図

注1. 近藤義郎「共同体と単位集団」考古学研究第6巻第1号　1959

注2. 竹ノ下遺跡で中期中葉の幅2m深さ1.8mのV字溝が発見されており、紫保井遺跡でも前後する時期の住居址が発見された。



S. 集落址
G. 墓　　址
e. 弥生時代前期
m. 弥生時代中期
l. 弥生時代後期

Fig. 2. 沼E遺跡周辺の弥生時代遺跡分布図

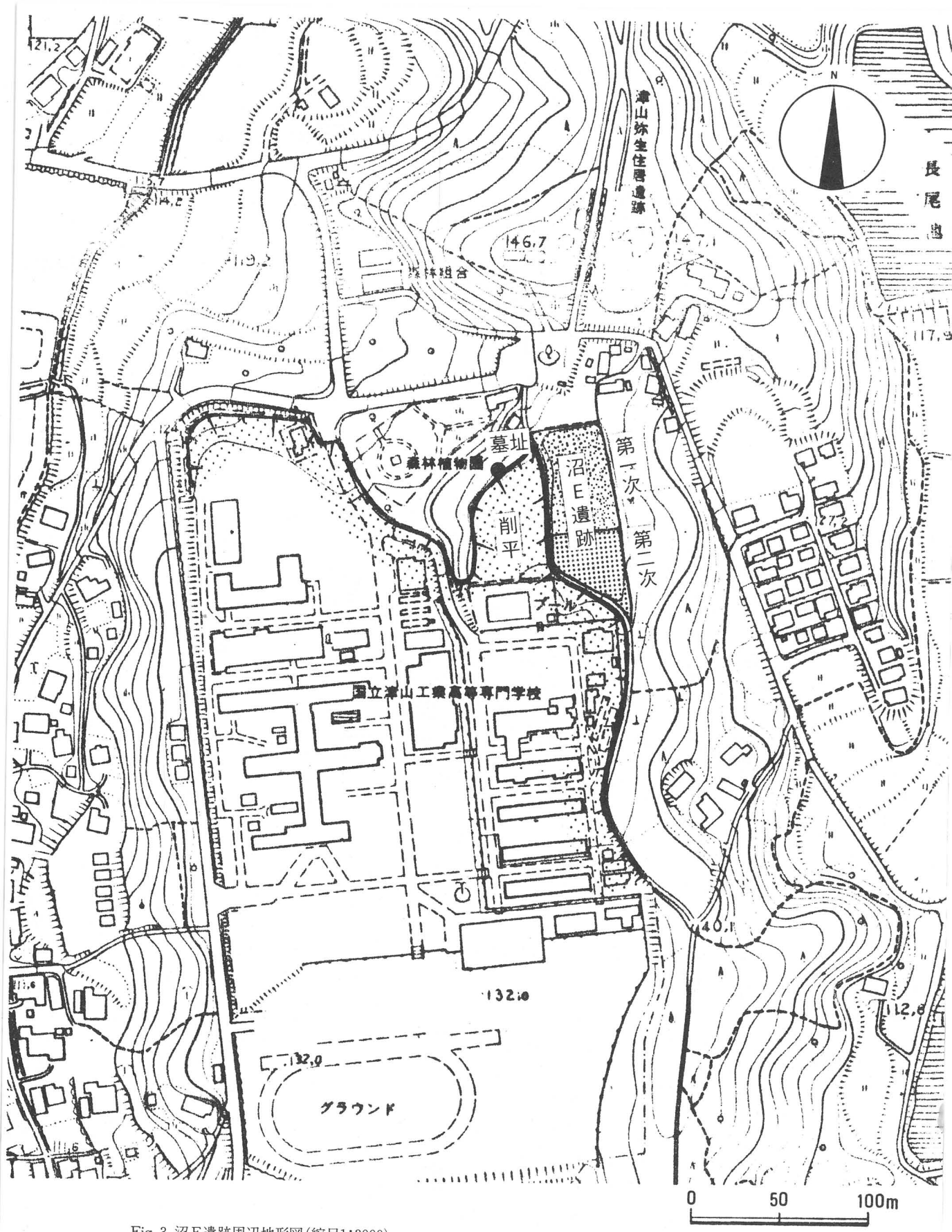


Fig. 3. 沼E遺跡周辺地形図(縮尺1:3000)

第２章　発掘調査の概要

１　発掘調査の経過

発掘調査は、昭和55年７月１日開始８月30日終了を予定していたが、例年にない長雨で着手を若干見合わせ７月20日から実施した。以後も雨の日が多く、作業はたびたび中断においこまれた。第１次調査にあわせ、まず磁北方向に10ｍグリッドを設定し、東から西へ順次１～５、北から南へＡ～Ｆと呼ぶことにした。

対象地は、戦時中青年学校校地として利用され、平坦に削平造成されており、北半は一部すでに自然層が露呈し、南半は厚く埋めたてられていた。

確認調査は、北部分にかたよっていたため、まず北半の遺構検出を急ぎ、その結果をみて南半の取り扱いについて判断することとした。

表土剝ぎには、重機を使用した。確認調査により自然層上に薄く黒色土が堆積し、その上の堆積土は青年学校当時の造成土と判断されていたため、重機の使用はほとんど問題のないことと判断された。

北半の遺構検出作業で、１号、２号、３号、４号、５号住居及び７号長方形竪穴住居状遺構が検出された。この結果、遺構は確実に南へと延び広がっていることが明らかとなったため、既発見の遺構を掘り下げるとともに、南半部分の樹木伐採作業と重機による表土剝ぎをおこなったが、排土はトラックによって運びだす必要があり、例年にない長雨にたたられ作業は難行し予定外の時間と出費をしいられた。結局、対象地全域の表土を取り去ったのは８月下旬のことであった。

南半部分では、６号、８号、９号住居、溝がまず検出された。

９月末、これら検出遺構についてはほぼ発掘を完了した。しかし、柱穴とみられる落ち込みが全域に散在しており、建物の存在が予想されたので、これらを掘り下げる必要があった。ところが９月末をもって調査費用は底をつき、調査員２名、補助員１名で細々と発掘を続けざるをえない状態においこまれた。この過程で、建物Ⅰ、Ⅱ、11号住居が検出された。北東部分で多数の柱穴群が検出されたが、これについては建物としてまとめることができなかった。

悪戦苦闘の末、10月末日をもって一応調査は終了することができた。

なお、全景写真の撮影にあたっては、津山圏域消防本部のハシゴ車の出動を要請した。全景写真は、地上約30ｍの位置から撮影したものである。

調査中、９月27日(土)に現地見学会を催した。当日、小雨にもかかわらず80数名の見学者が参加された。また、新聞報道されたため、見学会以降も見学者が多く、延べ 200名以上が見学されたものと思う。

2　遺構の概要

遺跡は、西部及び南部を土取り並びに国立高専の建設によって大きく削平されており、第１次調査部分とあわせても本来の遺跡範囲のごく限られた部分のみ調査が及んだものと思われる。したがって、集落全体の復元という点ではかなり限定された資料とならざるを得ない。

今回の一連の発掘で検出した遺構には、竪穴住居８軒、長方形竪穴住居状遺構２棟、溝、木棺墓、土器棺墓、土壙墓等がある。

竪穴住居址は、円形プラン７、隅丸方形１で圧倒的に円形のものが多い。いずれも中央に囲炉裏とみられる凹穴(注１)を備え、それは中期のものより後期のものが深度を増すのが一般的傾向である。住居規模は辺長３ｍのものから直径７ｍ強のものまで変異差が大きい。大型住居を主に小型住居が伴うあり方は、美作地方の中期住居群一般と共通する。７号長方形住居状遺構は、切妻竪穴建築で、壁の存在が考えられた。妻入入口に土壇を残し、棟通り奥に強度に加熱された炉を備える。通常作業場とされるものであるが作業場とする根拠はない。土器が多く特に、甕形土器片が多いのは、この種の遺構の機能推定の手がかりとなろう。

建物については、Ⅰが１間×２間、Ⅱが２間×４間で、Ⅱは束柱構造をもつ規格性に富んだ建築物である。柱穴の多くから自然流入によるとみられる土器数片が出土したが、人為的に破砕投入されたものはない。出土土器からみて、中期後葉から後期初頭のものであろう。

中期中葉と考えられる溝は、直線上に約20mにわたって確認され、住居群を画した可能性が強い。沼遺跡の丘陵を横断する溝と同一機能を有するものであろう。

北西部発見の墓址は、土取りにより大きく削り取られていたが、地形及び付近の断面観察から推し、大規模な墓群が存在したとは考えにくい。

中期後葉から、後期初頭にかけ住居群に隣接し小規模な墓群が併設される例は、竹ノ下遺跡、京免遺跡で確認されており、本例もこういったあり方を示すあり方を示す墓群の一例と考えられよう。

注1. 中央穴の評価については票野克己氏の教示を得た。

遺構番号	遺構名	遺構規模	主柱穴数	(口部寸法)中央穴	炉	時期	備考
1	1号住居址	円形 直径７ｍ	6本	55×85cm 有	有	中期中葉	紡錘車２ 小型扁平両刃石斧１
2	2号住居址	隅丸方形 辺長3m？	4本	40×50cm 有	無	中期後葉	
3	3号住居址	円形 直径6.5m？	5本	70×50cm 有	無	中期後半	石庖丁
4	4号住居址	円形 直径５ｍ	4本	40×40cm 有 (土堤)	無	後期初頭	石庖丁2. 小型扁平両刃石斧1. 中央穴から壁体溝に向かい２本の溝が出ている
5	5号住居址	円形 直径６ｍ	6本	50×50cm 有	無	後期初頭	叩き石 住居外周溝を伴う
6	7号長方形竪穴	長方形 5m×3m？	8本?	無	有	中期中葉	短辺に入口状の土壇があり炉はきわめて良く焼けている
7	8号住居址	円形 直径7m？	6本?	80×50cm 有	無	中期後半	紡錘車未製品１
8	9号住居址	円形 直径５ｍ	4本	55×60cm 有	有	中期後半	紡錘車４
9	10号長方形竪穴?	長方形 又は方形	?	?	?	?	
10	11号住居	円形？ 直径6m？	5本	新70×55cm 古50×45cm 有	?	中期後半	床面はすでに削平を受け、中央穴、柱穴のみ残存
11	建物Ⅰ	桁行 梁行 5m×2.5m	6本	／	／	中期後葉＼後期初頭	
12	建物Ⅱ	桁行 梁行 7m×3.5m	12本	／	／	中期後葉＼後期初頭	
13	溝	検出部長 20ｍ (幅50～100cm)	／	／	／	中期中葉	石庖丁

表１　遺構一覧表

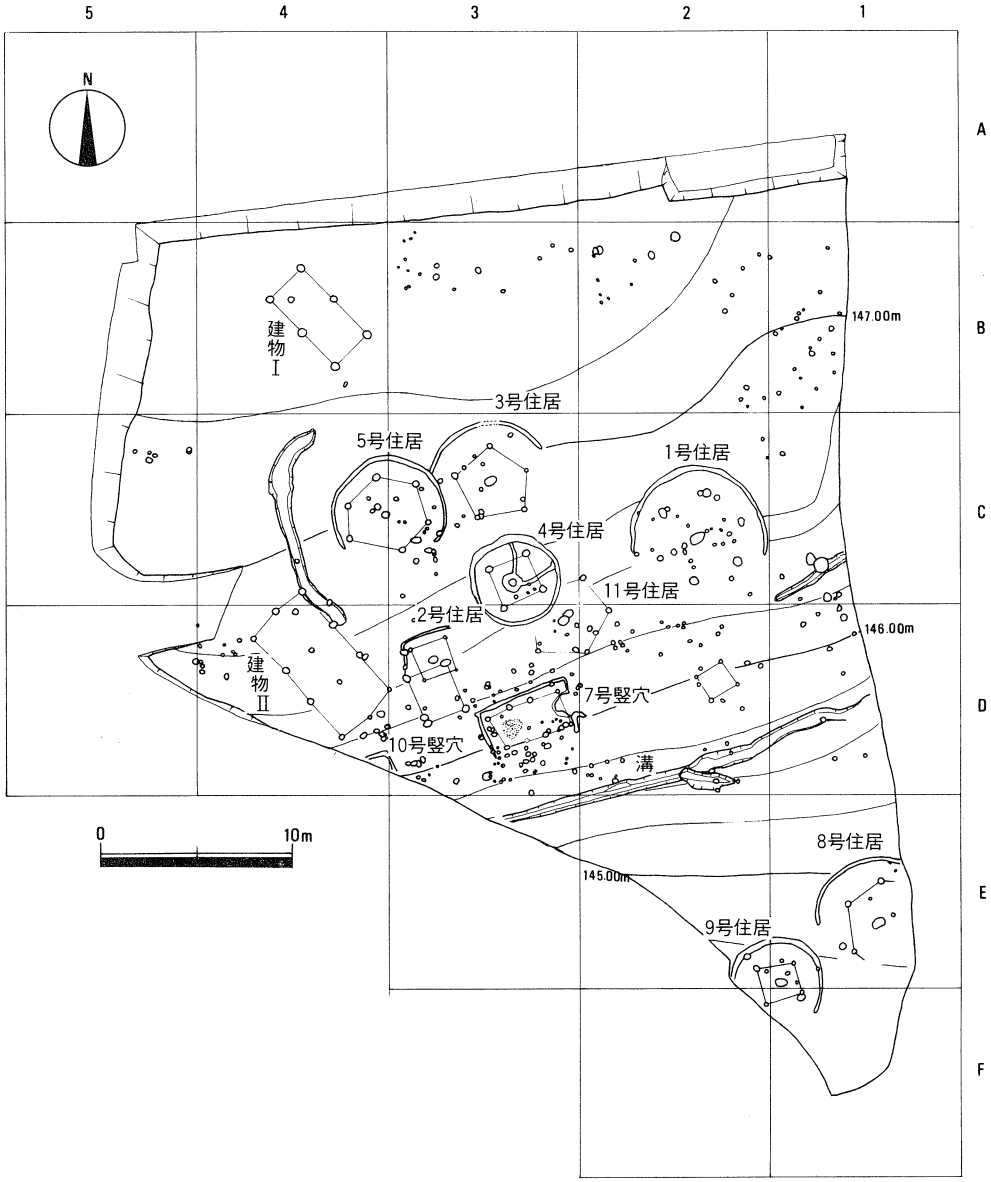


Fig. 4. 遺構配置図(縮尺1:400)

第3章　遺構及び遺物

1　住居址

1号住居址

直径7mの6本柱円形住居址である。残存良好な北壁で壁高約30cmを計る。南半は、流出削平され壁体溝を残していない。東部分では、現在の小溝により攪乱を受けている。楕円形の中央穴は、85×55cmで深さ約30cmである。長軸方向に小柱穴2が存在するのは中央穴に関連するものとみられる。柱間距離は、P1～P2、2.5m、P2～P3、2.4m、P3～P4、2.2m、P4～P5、2.5m、P5～P6、2.15m、P6～P1、2.45mで、各主柱にはいずれも直径15～25cmの柱痕跡を残している。良く焼けた焼土面Aは、P1によって切られており、本住居に先行するものとみられ

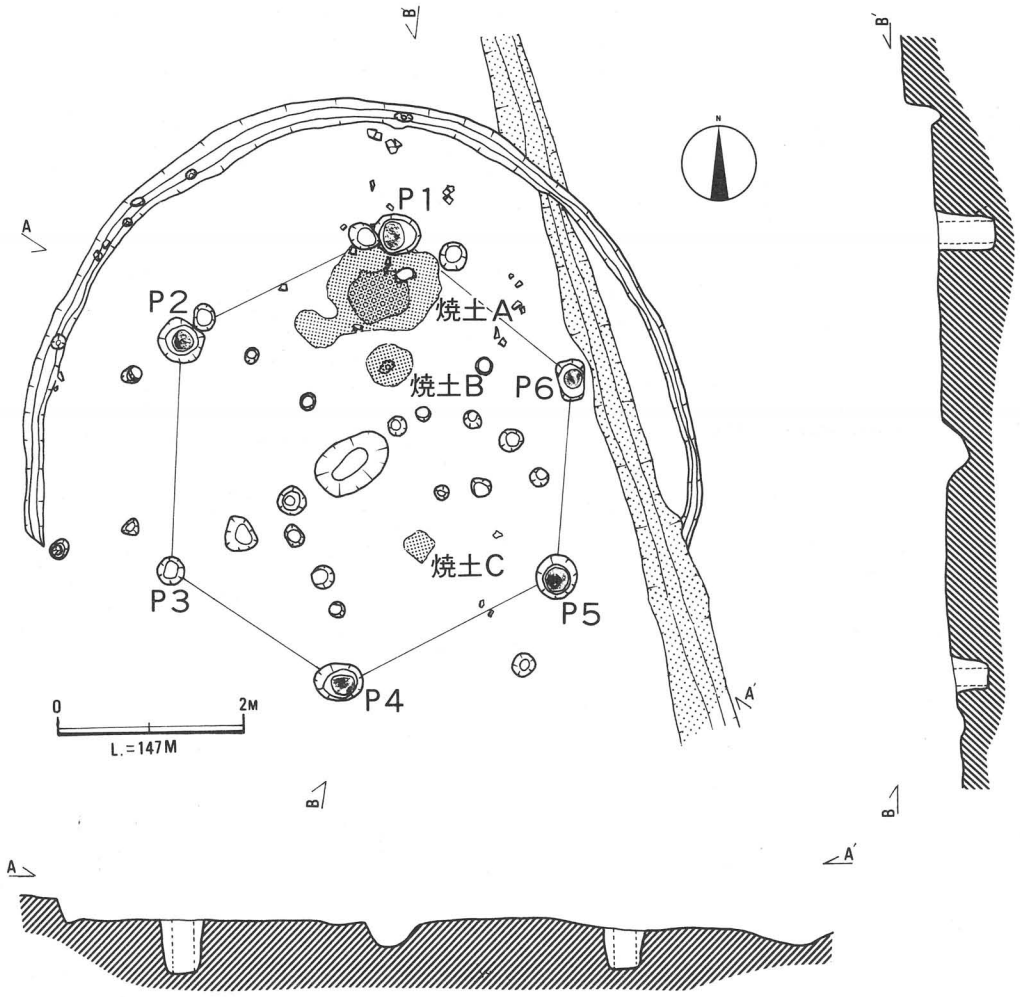


Fig. 5. 1号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

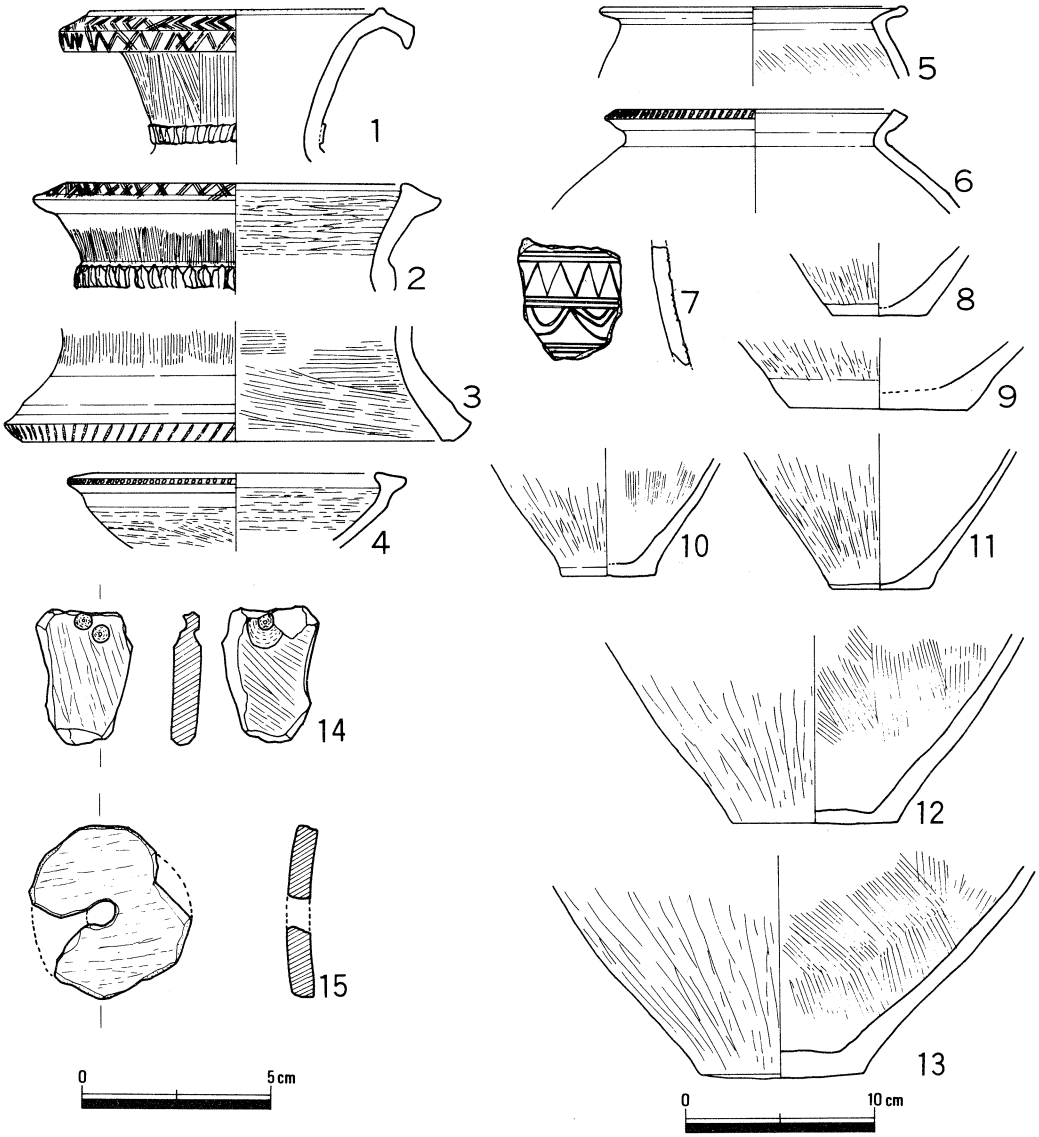


Fig. 6. 1号住居址出土の遺物(縮尺 土器1:4 紡錘車1:2)

る。焼土面B、Cは、本住居に伴うと考えられる。床面でサヌカイトチップ少量が検出された。

出土遺物　1、2は壺形土器口縁部で、頸部下端に貼付凸帯を一巡させる。外面刷毛、内面1はナデ、2はヘラ磨き仕上げである。1は、口縁立ち上がり部端に刺突が一巡する。3は器台脚部、4は高坏坏部でていねいに仕上げられている。7は、壺形土器肩部片であろう。5、6は甕形土器で頸部外面を強くヨコナデするクセをもつ。8～11は甕形土器底部片とみられる。12、13は、壺形土器底部片とみられる。8、10には内面に、11、12は外面に、また5は内外ともにススの付着が認められる。14、15は紡錘車で、14は未製品、表裏両面より穿孔をうけているが、両面とも貫通していない。

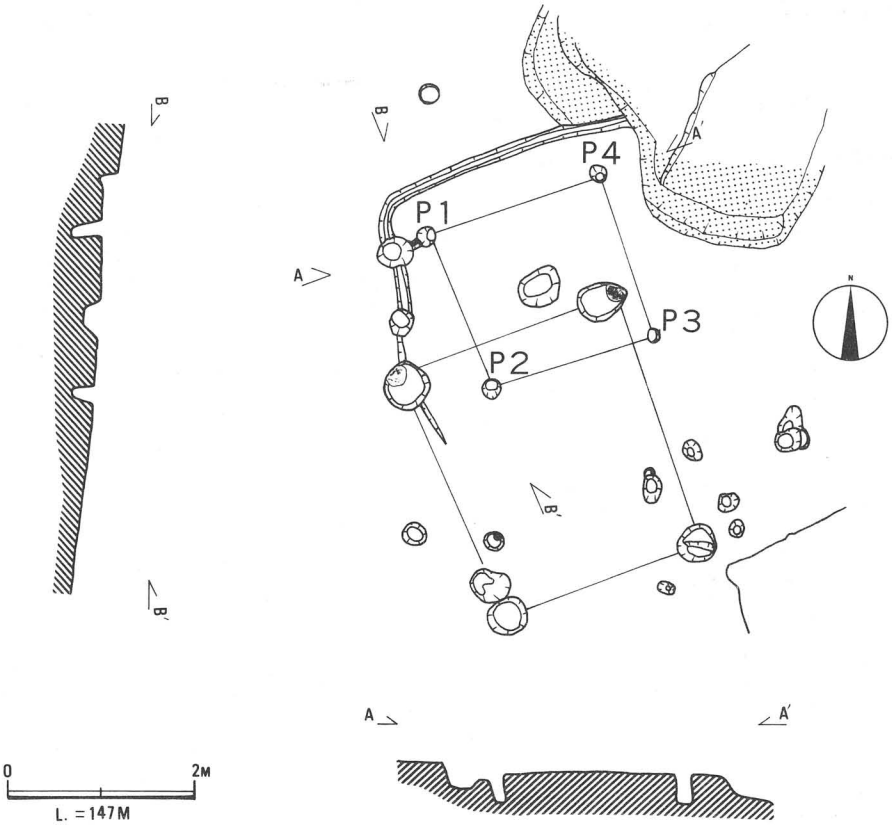


Fig. 7. 2号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

2号住居址

1辺長約3mの隅丸方形四本柱住居址で、流出がはなはだしい。50×40cm深さ20cmの不整形中央穴を備える。主柱穴掘方は、他の住居に較べ小さく直径15～20cmである。各主柱間距離はP1～P2、1.7m、P2～P3、1.8m、P3～P4、1.8m、P4～P1、1.9mである。埋土中に数片の弥生式土器小片を発見したのみで、その他の出土遺物はない。南部分で、中期末から後期初頭とみられる1間×1間の建物に切られており、数片の土器から判断して、中期後葉の住居である可能性が強い。建物は、直径50cm前後の柱掘方をもち、北2本には直径20cm前後の柱痕跡をとどめる。

出土遺物　図示し得た土器片は、右図の壺形土器肩部片1片のみである。ヘラ描の斜格子文で飾り、下端に二条の沈線文が巡らされている。内面は、刷毛調整ののちナデにより仕上げられている。この種の壺は、押入西、稼山遺跡等に好例がある。

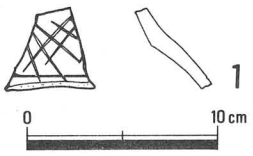


Fig. 8.
2号住居址出土の土器(縮尺1:4)

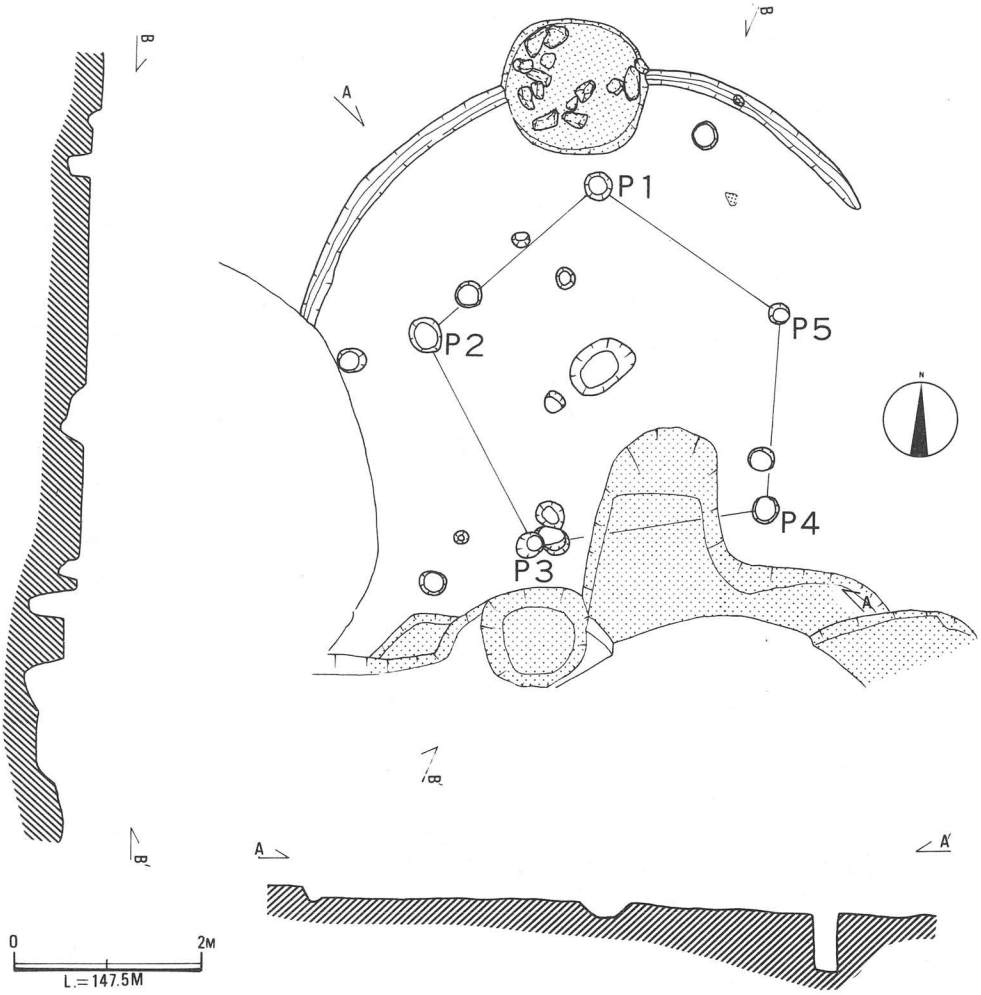


Fig. 9. 3号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

3号住居址

直径6.5mの円形5本柱住居址である。南部分で後世の攪乱をうけ、北壁を切って円形の近世墓がつくられるなど全般に保存状態は悪い。壁体溝も3分の1を残すのみである。60×50cm深さ20cmの楕円形中央穴を備える。各柱間距離は、P1～P2、2.4m、P2～P3、2.5m、P3～P4、2.5m、P4～P5、2.1m、P5～P1、2.4mである。少量の弥生式土器片が発見され、5号住居址に切られている。

出土遺物　1は、甕形土器底部小破片で、外面はタテ方向のヘラ磨き、内面はナデにより仕上げられている。

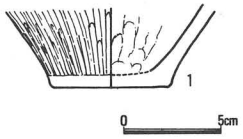


Fig. 10.
3号住居址出土の土器
(縮尺1:4)

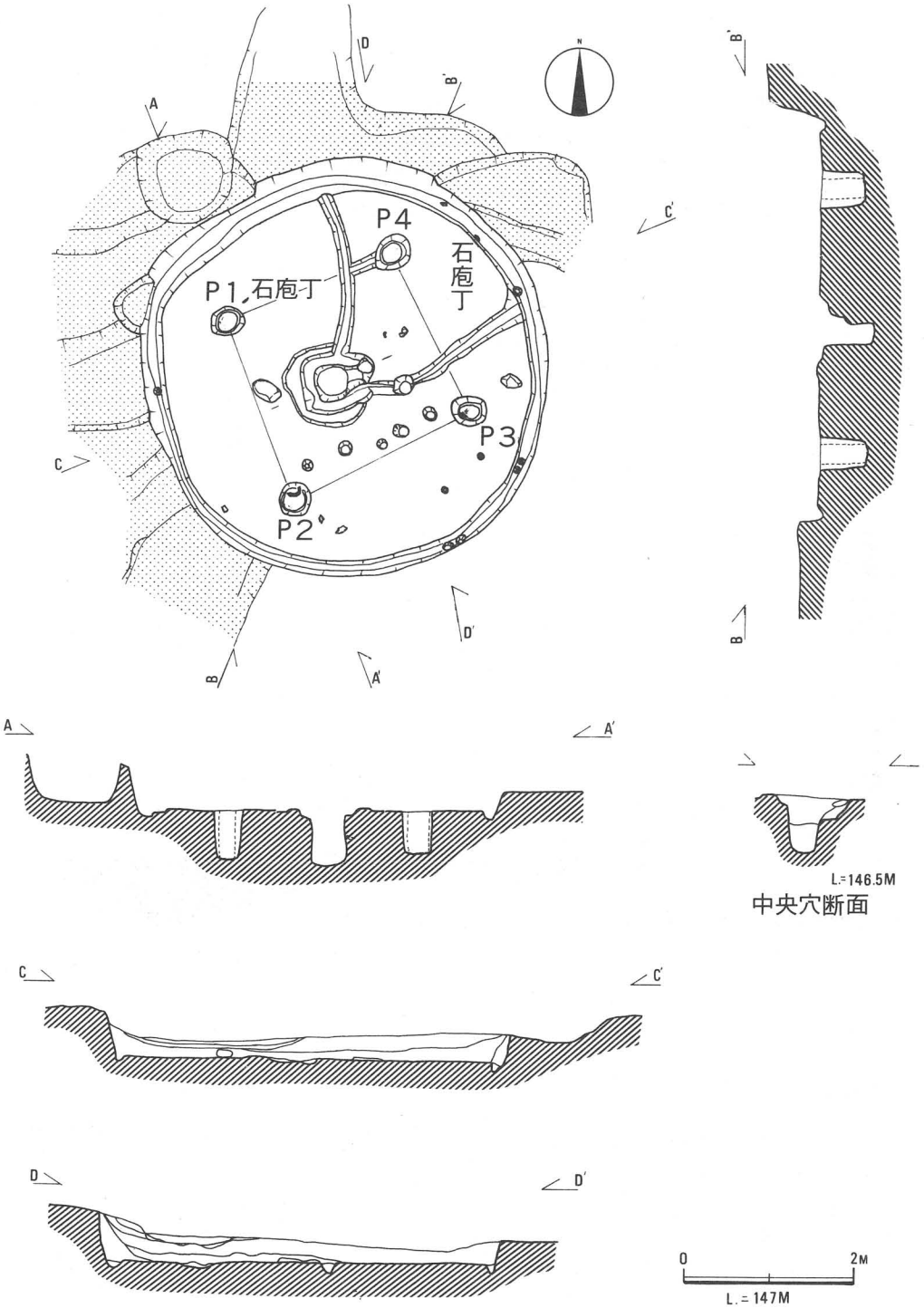


Fig. 11. 4号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

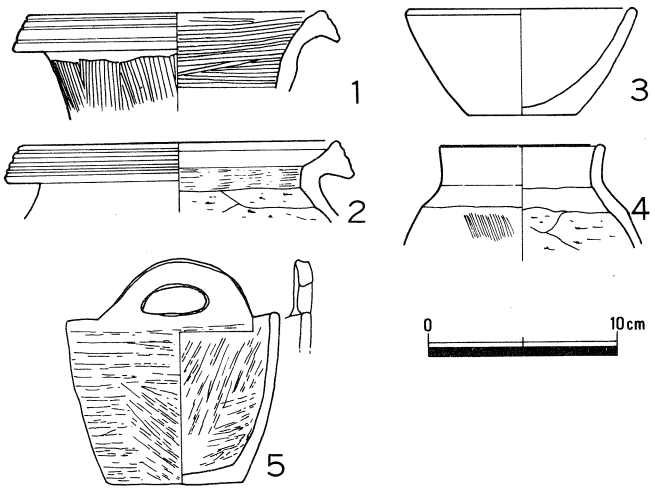


Fig. 12. 4号住居址出土の土器(縮尺1:4)

4号住居址

直径約5mのややかくばる円形4本柱住居址である。上層は、青年学校当時ないしは戦後に大きく攪乱を受けており、攪乱痕からみて上部になんらかの構築物が存在したことが考えられた。しかし幸い攪乱は埋土中位にとどまり、保存状況は概して良好であった。本来深い竪穴住居でもあったのであろうが、現存壁高は50cmを計る部分がある。口部直径40～45cmの円形中央穴上面には、約20cm幅の平坦面が取り囲み、さらにその外側に幅20cm程度の明瞭な土堤が一部を除いて取り巻いていた。壁体溝の北と東部分から各1本小溝が中央穴へと連なっている。各主柱とも柱痕跡が認められ、その直径は20～30cmを計る。ただし、この直径をそのまま柱の根回りの直径とするにはやや太すぎるように思われる。

各主柱間距離は、P1～P2、2.2m、P2～P3、2.3m、P3～P4、2.1m、P4～P1、2.1mである。床面には、上面平坦な台石2個と中央穴肩部分でこれよりやや小型の平石1個が発見された。また、完形で残されたとみられる把手付鉢形土器及びやや大型の土器破片数点、石庖丁2点、砥石1点などが発見された。その出土状況ないしは土器の形式学的根拠からみても、いずれも一括遺物としてよいものと考えられる。壺形土器1は、美作の既発見の後期初頭土器に較べやや異質の印象を与えるもので、この点注意される。

出土遺物　1は、長頸壺形土器口縁部片で、口縁部端を下方に肥厚拡張させる。拡張した口縁部端面には、3条の凹線文を巡らし、頸部外面には荒いタテ方向の刷毛目痕跡をとどめている。内面は、外面で使用した刷毛と同一原体によりヨコ方向の刷毛仕上げをおこなっている。白褐色を呈し、1～3mmの砂粒を含んでいる。2は、短頸壺口縁部片で、口縁部端面を上下に肥厚拡張する。同端面には、4条の凹線文が巡らされ、外面はヨコナデ仕上げである。口縁部内面もヨコナデ仕上げ、頸部屈曲部にヨコ方向の刷毛目痕を残す。3は、小型鉢形土器で、器壁の荒れ激しく調整不明瞭なるも、内面の一部にかすかにヘラ磨き痕を残す。3は直口壺で、口縁部内外はヨコナデ仕上げ、胴部外面に薄く刷毛目を残す。胴部内面には、やや下位からヘラ削りが加えられている。5は、把手付鉢形土器で、内外面ともヘラ磨きにより丁寧に仕上げられている。底部外面に、一部ススの付着がみられる。

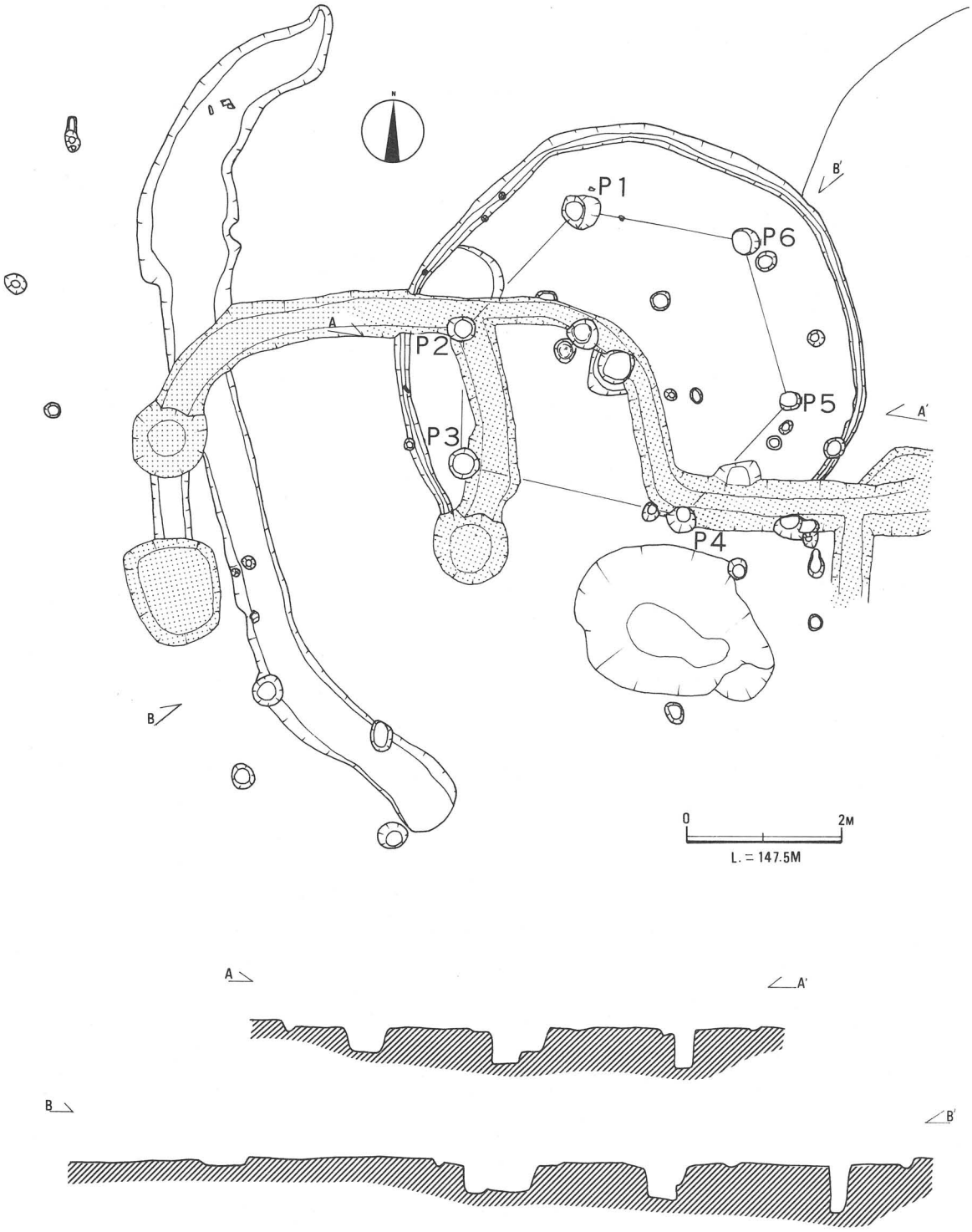


Fig. 13. 5号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

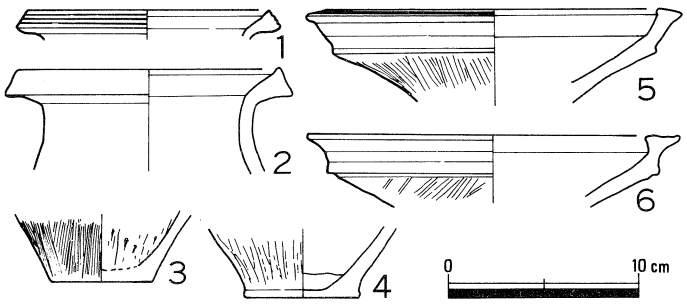


Fig. 14. 5号住居址出土の土器(縮尺1:4)

5号住居址

直径約6mで、主柱位置外辺がやや角ばる円形6本柱住居址である。青年学校当時の溝によって縦横に攪乱を受けている。また、削平度がひどく、ほぼ床面近くを残すのみの状況となっていた。直径40～50cmの円形中央穴は、溝で半分削り取られているが、残存部分には2段掘りの痕跡を残している。床面からの中央穴深度は、約50cmを計るが土堤の痕跡はない。主柱間距離にはややバラツキがあり、各柱間距離は、P1～P2、2.1m、P2～P3、1.7m、P3～P4、2.9m、P4～P5、2m、P5～P6、2.1m、P6～P1、2.2mである。

埋土中に数片の弥生式土器片が発見された。中期に属するとみられる2片を除くといずれも後期初頭に位置づけられる。

住居の西外側に、幅70～120cm、深さ10cm程度の浅い溝が住居を囲むように発見された。溝発見の土器も、5号住居埋土出土のものと同一型式に属するものとみられ、この溝を、5号住居の付属施設としてよいように思われる。

眼下の沼京免遺跡では、この種の溝が住居を取り囲む例が数多く発見されており、また倉敷市の上東遺跡にも同様の事実があって、この溝は残存程度が悪いものの排水用の住居外周溝の一部であったと考えられる。京免遺跡では、外周溝中に柱穴を残すものがあったが、本例では溝に伴うとみられる柱はない。

出土遺物　1は、小型壺形土器口縁部片で、肥厚した口縁端部に3条の凹線文を巡らす。内外面ともヨコナデ仕上げで、外面の一部にススの付着がみられる。砂粒は少ない。2は、長頸壺形土器口縁部片で、口縁端部を上下にやや肥厚させている。器壁の荒れ激しく、調整不明瞭であるが、概ねヨコナデ仕上げと思われる。3、4は、壺形土器底部片で、3は外面タテ方向の刷毛目痕を残し、内面にはヘラ削りが加えられている。4は、外面タテ方向のヘラ磨き、内面はナデにより仕上げられている。4は、混入品と考えられよう。5、6は、高坏形土器坏部破片で、いずれも坏部中位で屈曲をみ、立ち上がり部端を水平に拡張している。6は、拡張した端部上面に4条の凹線風の線を残し、坏中位の屈曲部外面にも凹線状の明瞭な段を形成している。いずれも、立ち上がり部内外面及び坏部内面はヨコナデにより仕上げられており、坏部下位外面は、5は刷毛により、また6はヘラ磨きにより仕上げられている。

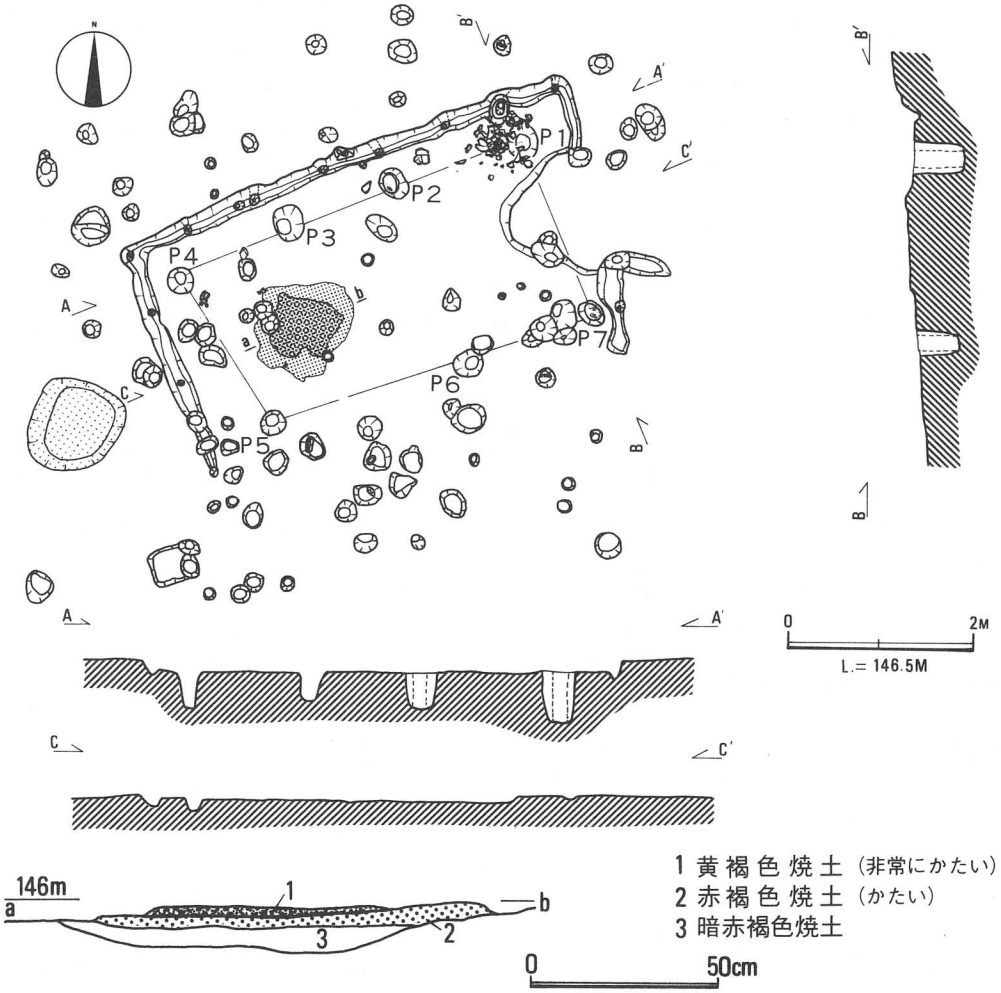


Fig. 15. 7号長方形竪穴住居状遺構平面図、断面図（縮尺1:80、炉断面図1:20）

7号長方形竪穴住居状遺構

長辺5m、短辺約3mの長方形竪穴遺構である。南半の保存状態は悪い。東短辺中央に、床よりの厚さ10cmほどの舌状張出しを内側にもつ。入口の土壇と考えられるが本来はもっと厚くあるいは階段状を呈した可能性がある。妻入奥の中央部に、直径1m前後の非常に良く焼けた炉が検出された。炉面は平坦で中央部は黄褐色に変色している。柱間は、1間×3間と考えられるが、P5～P6間に1柱がなく、P4の柱痕跡も他に比しやや不鮮明なものであった。壁体溝は壁体痕と壁体溝掘方に区分できた。壁体痕跡は約15cm、同掘方は約25cm幅を示している。壁体溝中には、50～80cm間隔に杭跡が検出された。杭はいずれも斜めに打ちこまれており壁にくい入っている。遺構外縁を取りまく小柱穴も、その多くは本遺構に伴うものと思われる。P1付近で、土器1、2が上方より転落した状況を示し発見された。出土土器に甕形土器片の多いことが注意される。

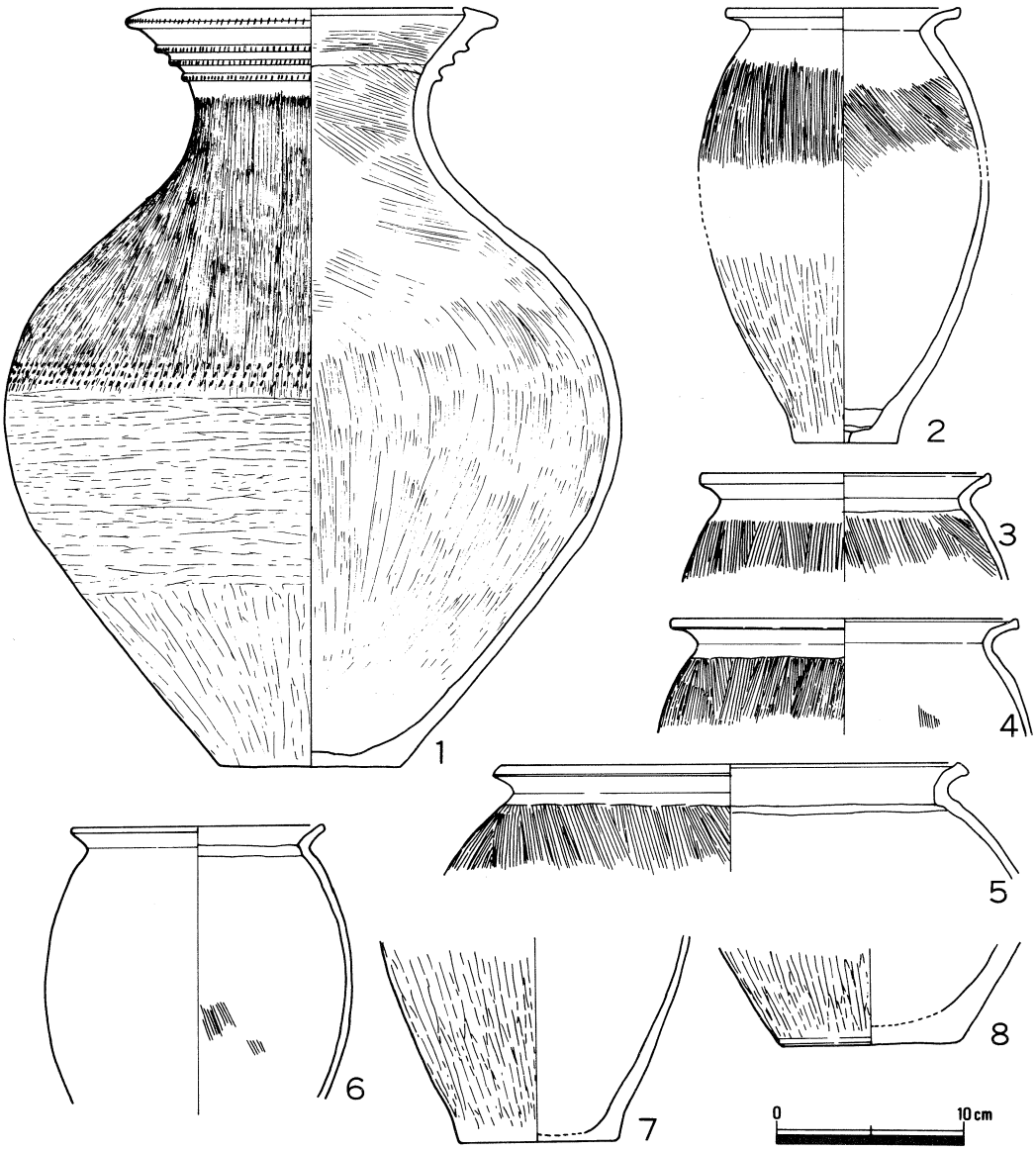


Fig. 16. 7号長方形竪穴住居状遺構出土の土器(縮尺1:4)

出土遺物　1は、赤褐色の壺形土器で、口縁外面に断面三角形の貼付突帯3条を巡らす。各凸帯に刺突文が一巡する。外面上半は刷毛、下半はヘラ磨き仕上げ。胴中位に連点文が一巡する。内面は刷毛仕上げによる。2～8は、いずれも甕形土器片とみられ、くの字形頸部から出た口縁部端面をわずかに肥厚させる。口縁部内外面はヨコナデが加えられ、肩部分にヨコナデによって生じた段が認められる。内面は、ナデ及び刷毛仕上げである。7、8の底部外面はヘラ磨き、内面はナデによって仕上げられている。2は、底に焼成前の穿孔があり、甑として用いられたもの。3、4、7、9にススが付着、6、8に火を受けた痕跡がみられる。

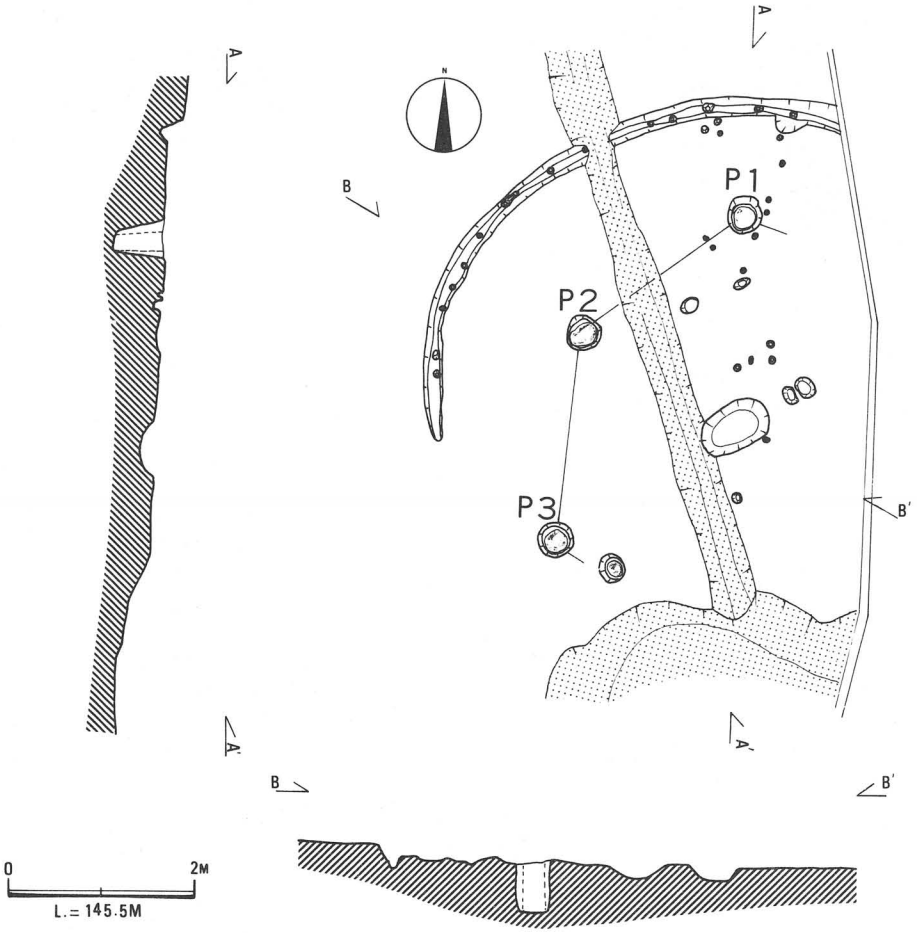


Fig. 17. 8号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

8号住居址

推定直径約7m強の大型円形住居址で、主柱穴は3本のみ確認されている。本来の主柱穴数は、6ないしは7本が考えられる。住居中央部を南北に現在の溝で切られており、南半の攪乱は特に著しい。最も良く残った北壁部分でも壁高約20cm程度で、残存状況は総じて悪い。壁体溝も全体の約4分の1を残すのみである。口径部80cm×50cmの楕円形中央穴を備え、中央穴の床面からの深度は20cm弱と浅い。発見された主柱穴掘方には、各々柱痕跡を残しており、その痕跡の示す柱直径は25cm程度である。幅15cmほどの壁体溝中には、20～50cm間隔に杭跡とみられる小穴が点々と確認された。埋土中より、弥生式土器片少量及び紡錘車未製品片が発見されたが、時期を確定するにたる資料とはなりえないものである。土器細片から推して、弥生時代中期後半のものであることはまちがいない。しいて推定すれば、後半のうちでも、やや古い年代が与えられるものと思われる。

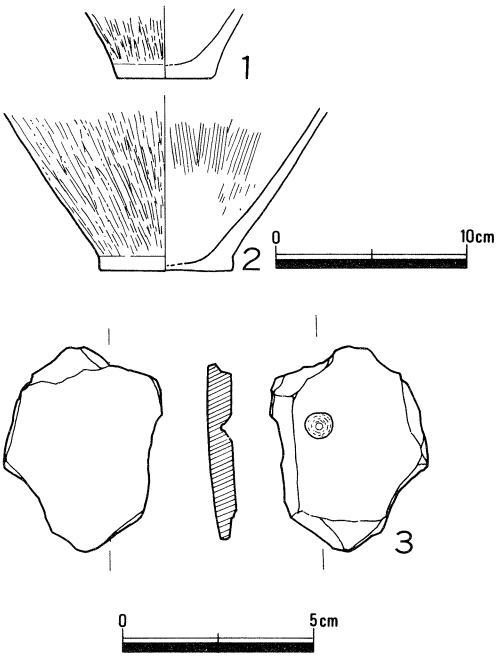


Fig. 18. 8号住居址出土の遺物
（縮尺 土器1:4、紡錘車1:2）

出土遺物　8号住居址出土の数片の土器片のうち、図示し得たものは1、2の甕形土器底部破片と3の紡錘車未製品であるが、この他数片の壺形土器胴部とみられるやや大型の破片が埋土より発見されている。

1、2は、ともに外面淡褐色の色調を示し内面は暗褐色を呈する。いずれも1mm程度の小砂粒を含むが、大粒のものは認められない。外面は、タテ方向のヘラ磨き、底部はナデにより仕上げられている。1内面はナデ仕上げ2は刷毛調整のあと底部にナデが加えられている。2内面にススが付着しているのは注意される。

3は、壺形土器胴部片を利用したとみられる土製紡錘車未製品で、表裏面ともナデにより仕上げられた破片である。外辺を荒く円形に打ち欠いた痕跡を残しているが、外縁の研磨痕はない。裏面より回転運動を利用したとみられる穿孔の跡があるが、貫通していない。穿孔痕は、当地方の粘板岩製石庖丁の穿孔法と共通した特徴を示している。製作途中破損して棄てられたものであろう。

10号長方形竪穴住居状遺構

隅丸方形住居ないしは長方形竪穴住居状遺構と考えられるもので、その多くは用地外に延びており、概要を摑むことすら困難である。現状では、隅丸方形住居、長方形住居状遺構いずれとも決し難いが、ここでは暫定的に長方形住居状遺構としておく。残存壁高は、約20cmである。主柱穴の検出はなく、幅15cm前後の壁体溝中には杭痕跡が顕著である。本遺構を切っている幅約30cmの溝は、現在の山道の旧側溝掘方である。出土遺物はない。溝および7号長方形住居状遺構との関連が注意されるが、手がかりは薄い。

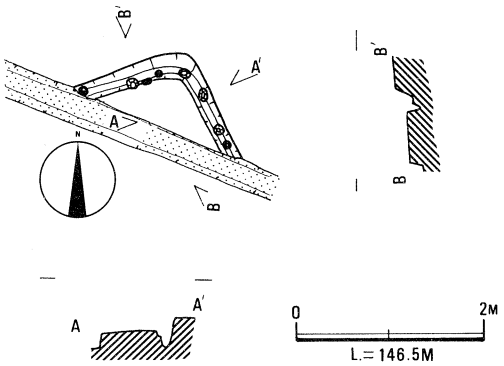


Fig. 19. 10号長方形竪穴住居状遺構平面図、断面図
（縮尺1:80）

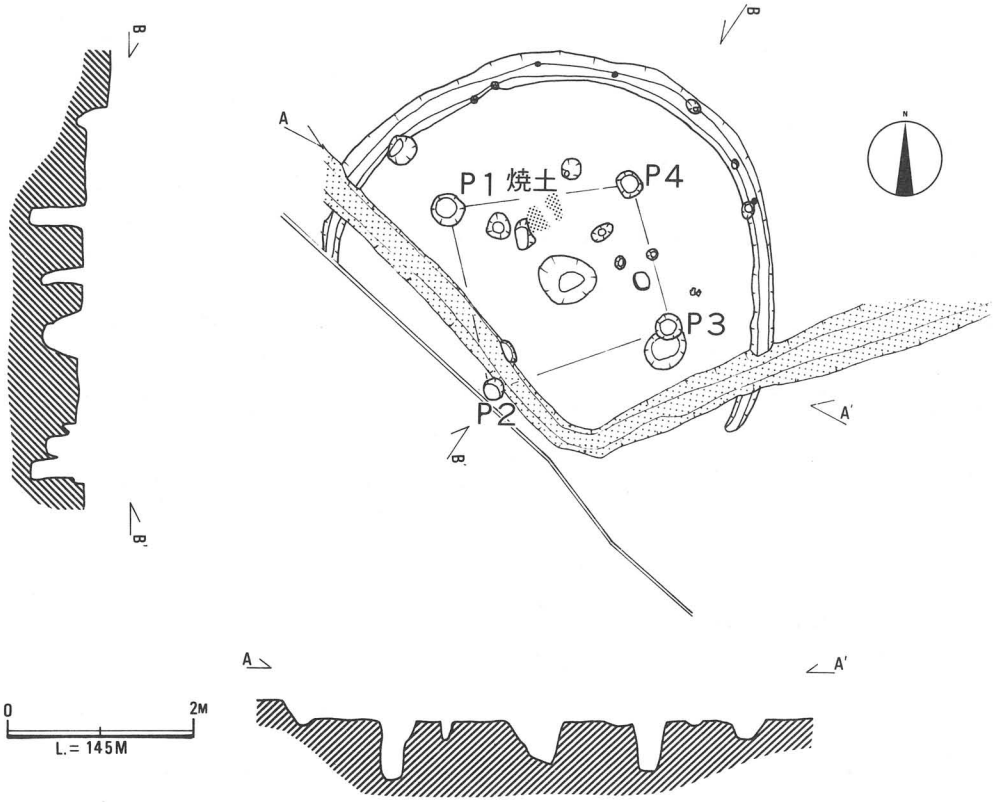


Fig. 20. 9号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

9号住居址

直径約5mの円形4本柱住居址で、残存状況は比較的良く、北壁部分の壁高は約30cmを計る。口部径50×60cmの不整円形の中央穴を備え、中央穴は床面よりの深さ約40cmを計る。各主柱間距離は、P1～P2、2.0m、P2～P3、2.0m、P3～P4、1.55m、P4～P1、2.0mである。P3の南に柱穴がありP3はこれを切っているが、この底には甕形土器底部No.8が逆転しておさまっているのが発見された。このことからみて、P3は、先行する柱を抜きとり、さしかえ柱を埋めたものであると考えられよう。このことは、P3の位置がやや北にずれる点からも納得される事実のように思われる。中央穴北側に焼土面が存在するが、それは強く焼けているとはみられない。幅約25cmの壁体溝中に杭跡とみられる小柱穴が点在するが、それほど整然と検出されたものではない。住居南部分をくの字形に走る溝は、山道旧側溝である。

床面ないしは埋土より若干の土器片及び土製紡錘車4点が発見された。紡錘車のうち2点は中央穴中より発見されたものである。いずれも概ね同時期資料とみられ、本住居廃絶時期は、弥生時代中期後半のうちでも古いと考えられよう。

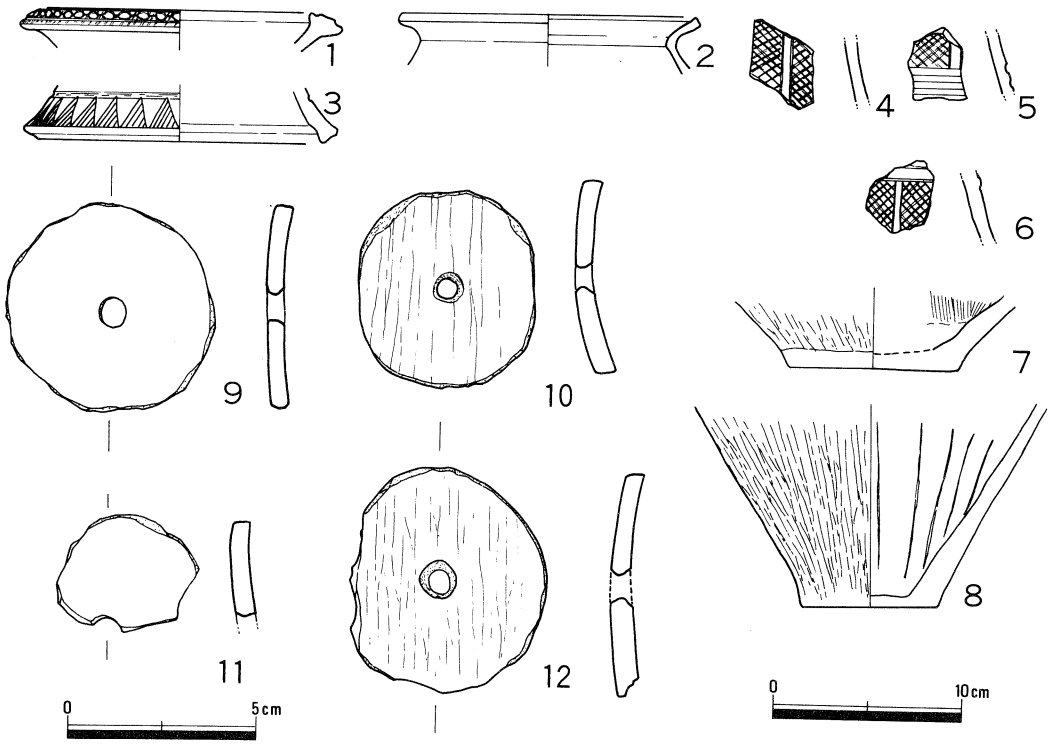


Fig. 21. 9号住居址出土の遺物(縮尺 土器1:4、紡錘車1:2)

出土遺物　1は、壺形土器口縁部片で暗褐色を呈する。ラッパ状に開く口縁部端を、上下に肥厚拡張させ、端面に3条の凹線文を巡らす。さらにヘラ状工具により連続斜線を施し、その上に円形浮文を加える手のこんだ作りの壺である。内外面ともヨコナデで仕上げられており胎土中に小砂粒を含むが大粒のものはない。2は、甕形土器口縁部片で、くの字形に開く頸部は、口縁端部で上方に低く立ち上がりをみせる。内外面ともヨコナデ仕上げで、胎土中に小砂粒を多く含む。3～6は、いずれも同一個体とみられる小型器台片で、脚部片3には鋸歯文が巡らされ、さらに凹線文で飾られている。筒部片4～6には、長方形区画を凹線文と沈線で作り出し内区をヘラ描斜格子文で飾っている。4には両側辺に、5は左側辺にまた6では右側辺に長方形の透し孔の痕跡が認められる。内面はナデ仕上げで、4、6には絞り痕が残されている。7、8は、甕形土器底部破片で、外面はタテ方向のヘラ磨き、7は内面刷毛及びナデにより仕上げられている。8内面もナデ仕上げであるが、絞り痕を残している。2と8に、ススの付着が認められ、8はその痕跡が帯状に広がっている。

9～12は、土製紡錘車である。9及び12は、中央穴中より発見されたものである。9、11は剥離激しく表裏面とも調整は不明である。10は、表面ヘラ磨き裏面ナデ仕上げ、12は、裏面ヘラ削りののちナデが加えられている。いずれも、外辺部を円く打ち欠き整形し、外縁部に研磨が加えられている。

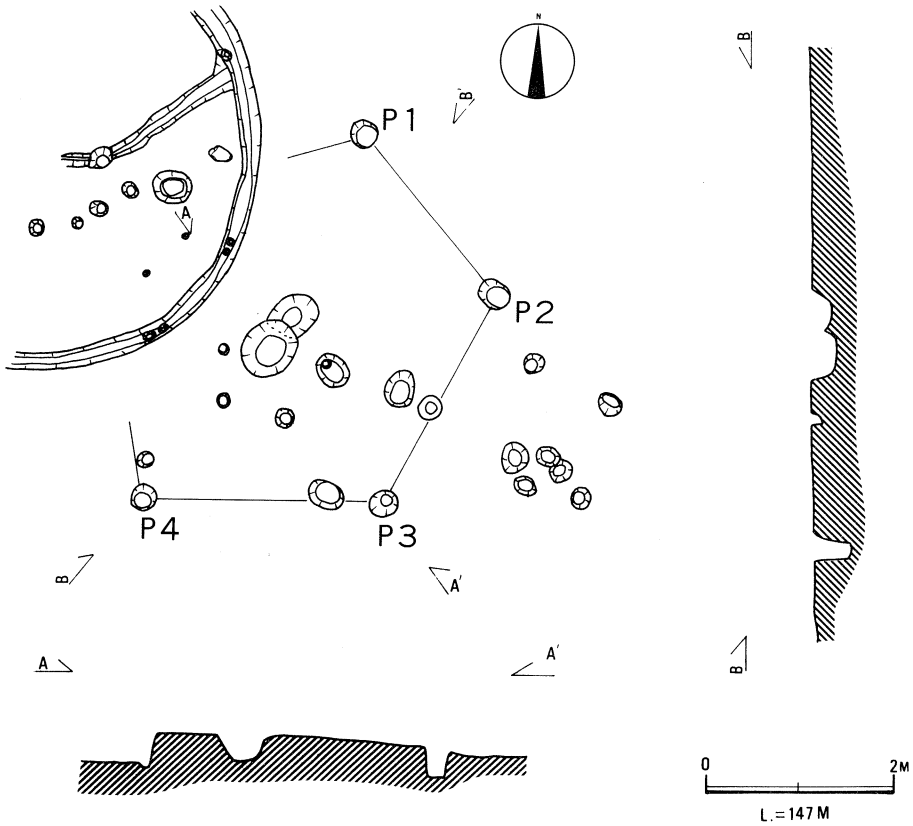


Fig. 22. 11号住居址平面図、断面図(縮尺1:80)

11号住居址

削平流出により住居床面もすでに消失した住居址で、４本の主柱穴と中央穴新旧２穴が確認されたのみである。壁体溝もすでに完全に消失していた。本来５本柱で構成される直径６ｍ程度の円形住居址であったとみられ、欠く１本の柱穴は４号住居床面に残るもののうちの１つであると思われるが特定できなかった。各主柱間距離は、P1～P2、2.2m、P2～P3、2.5m、P3～P4、2.5m を計る。中央穴は口部径65×55cm(新)、45×50cm(古)でいずれも楕円形を呈す。それぞれ現存部面からの深度は25cm及び20cm程度である。中央穴間の切合いは明瞭で、旧中央穴には黄色土が埋められていて中央穴移動に際し人意的に埋められたことがわかる。このことから、本住居は少なくとも一回上屋の建て替えがなされたと考えられよう。出土遺物は、旧中央穴中より弥生時代中期とみられる土器細片１片が発見されたのみである。必ずしも時期を限定することはできないが、中央穴の形状等と考え合わせ、中期後半のものである可能性が高い。

2　建物址

建物Ⅰ

桁行５ｍ、梁行2.5ｍの、１間×２間の掘立柱建物址である。各柱穴とも、直径20～25cmの柱根痕跡を残していた。各柱心々間距離は、P1～P2、2.55ｍ、P2～P３、2.35ｍ、P4～P5、2.6ｍ、P5～P6、2.5ｍ、P3～P6、2.4ｍ、P1～P4、2.5ｍで 比較的整然と柱が配置されているようにみえる。各柱掘方は、直径40～50cmを計る。柱穴内に少量の弥生式土器細片が包含されていた以外遺物はない。土器細片から判断する限り、弥生時代中期末から後期初頭の建物と考えられる。

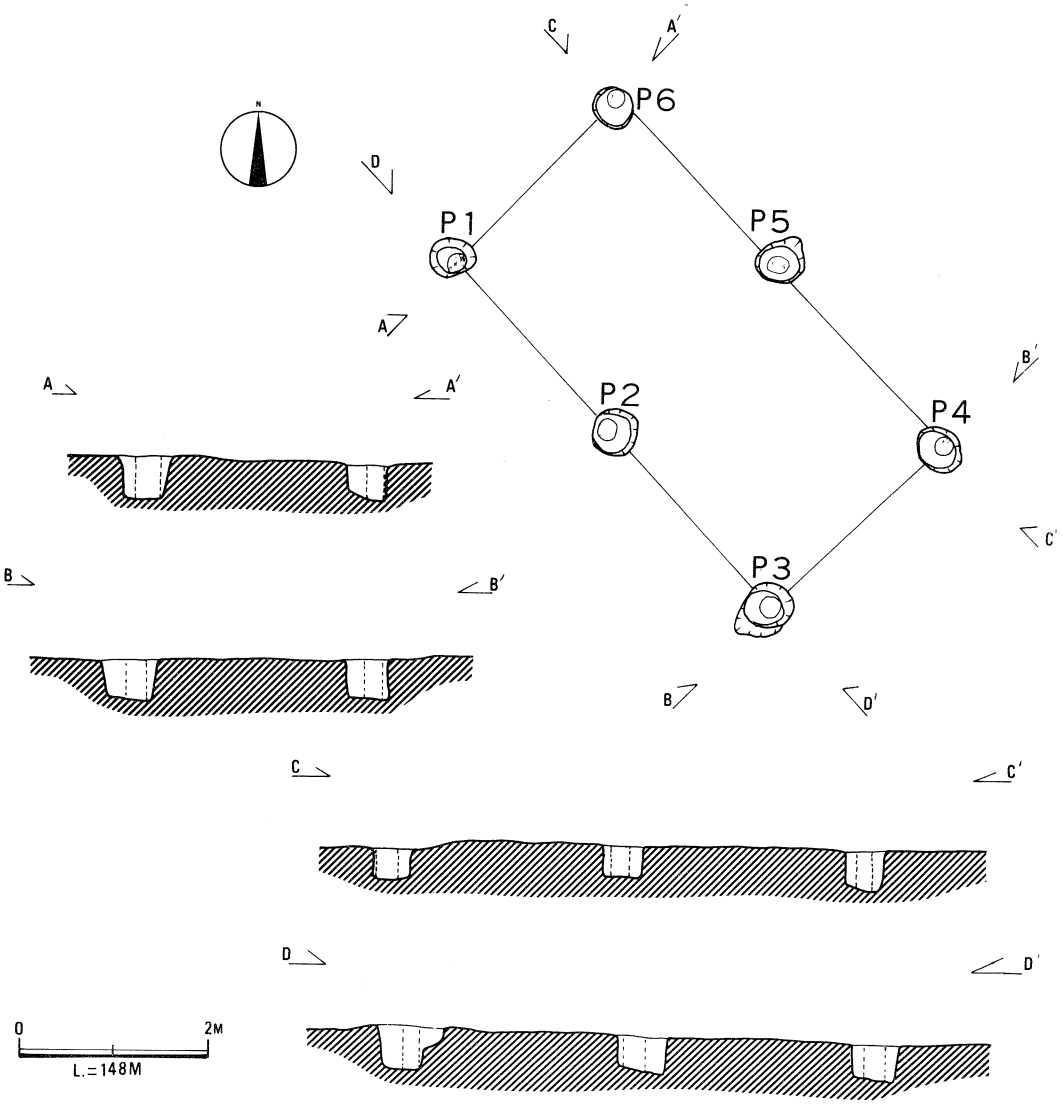


Fig. 23. 建物Ⅰ平面図、断面図(縮尺1:80)

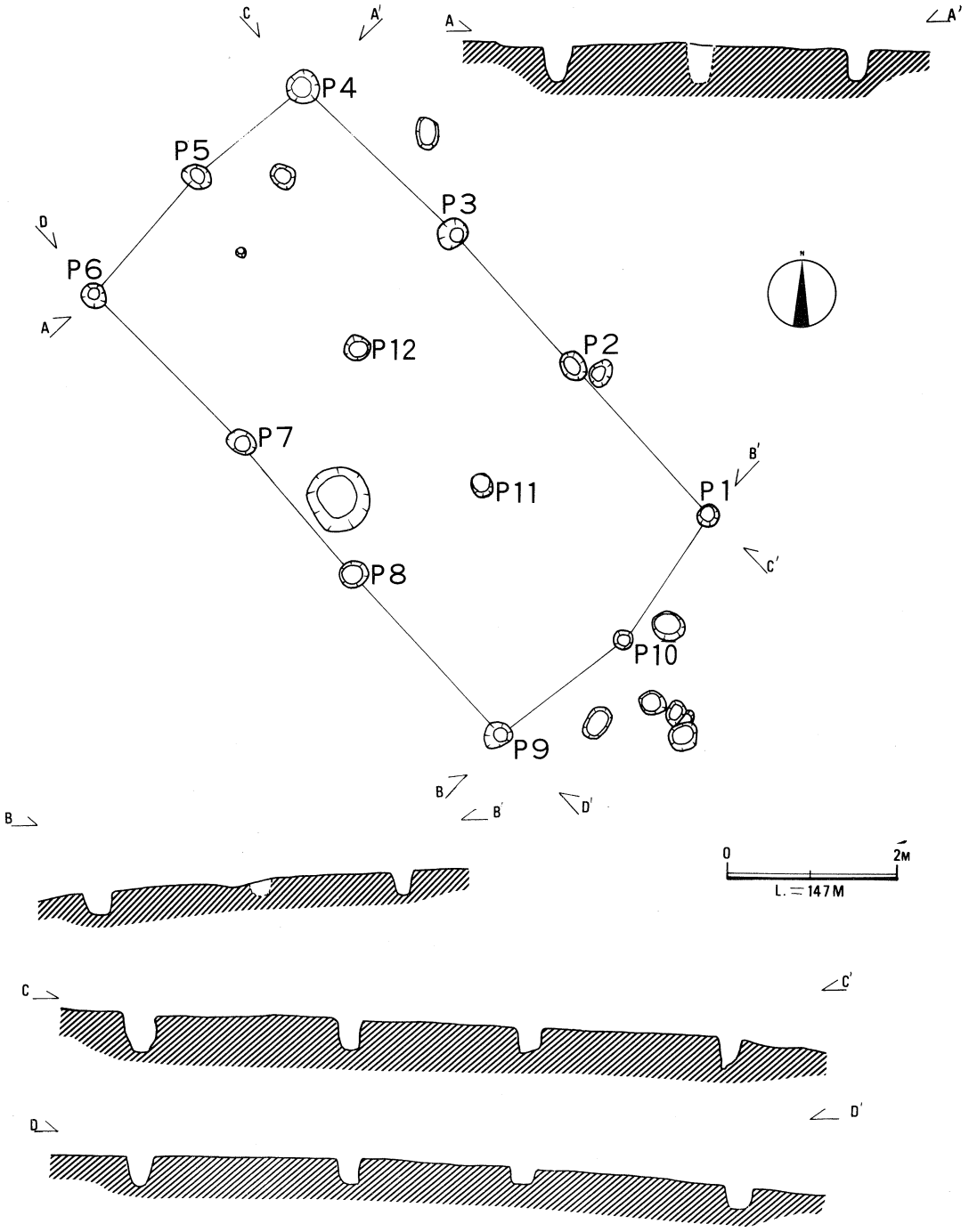


Fig. 24. 建物Ⅱ平面図、断面図(縮尺1:80)

建物Ⅱ

緩傾斜面につくられた桁行７ｍ、梁行3.5ｍ、２間×４間 12本の柱で構成される大型の掘立柱建物である。旧地表は、既にかなり削平流失されているとみられる。柱掘方は直径30～40cmで、小型の建物Ⅰと比較してもやや貧弱な印象を受ける。各柱穴とも柱根痕跡をとどめていなかった。各柱間距離は、P1～P2、2.4m、P2～P3、2.1m、P3～P4、2.5m、P4～P5、1.6m、P5～P6、1.9m、P6～P7、2.5m、P7～P8、2.0m、P8～P9、2.6m、P9～P10、1.8m、P10～P1、1.8mである。

弥生時代の建物としては、やや特異であるが、P11、P12はそれぞれ束柱と考えてよいように思われる。梁行が3.5mと特に長大であるため、これら束柱は構造上不可欠のものであったのだろう。P10の南東、棟通りの延長線上に存在する4穴の柱穴は、不明瞭なものばかりであるが、このうちには梯子穴が含まれているかもしれない。

各柱穴中より、弥生時代中期後葉から後期初頭の土器片少量が発見された。特にP5からは、後期初頭の土器片が比較的多く出土した。いずれも自然流入によるものと考えられ、必ずしも建物廃絶の時期を決定するものでないが、弥生時代中期後葉から後期初頭のものである可能性が強く、これ以降の建物にする根拠はない。（注１）

建物Ⅰ、建物Ⅱいずれも、梁行に対し桁行は倍の長さをもっており、ちなみに押入西の建物(Fig.33、注２)には、同比率３倍のものがあるなど、弥生時代の建物のうち一定のものは、梁行にたいし桁行が倍数の値をとるという規格性があったことが推測される。建物の資料分析が進めば、形態及び機能分析の一助となるかもしれない。

出土遺物　建物Ⅱ出土の土器で図示可能なものは、下図１、２のP5から出土した壺形土器片２点である。１は、淡褐色を呈し、肥厚した口縁部端は、斜下方に大きく張り出している。肥厚した口縁部端面には、４条の凹線文が一巡し、外面は荒い刷毛により仕上げられている。口縁部内面は、ヨコナデ、胴部内面はヘラ削りのあとナデ仕上げされている。２は、台付壺胴部片とみられ、外面はナデ仕上げ、屈曲部に連続刺突文が巡る。内面上半はヨコ方向のヘラ削り、下半は剝離のため不明である。

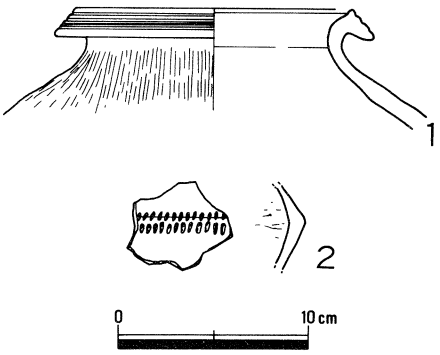


Fig. 25. 建物Ⅱ出土の土器(縮尺1:4)

注1. Ｐ４は５号住居外周溝と切り合っており切り合い関係は明瞭でないが、しいて考えるとすれば建物Ⅱは５号住居址に先行する。

注2.「押入西遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告３　1973年

3 溝 址

7号住居址の南で、傾斜面に直交し幅50～100cm、深さ30cm程度の浅い溝が直線状に約20mにわたって検出された。溝底レベルは、西方に向かってわずかに下がっており、水は西へ流れたものと思われる。検出部中ほどで枝分れするが、分岐溝はつづかずとどまる。溝内外に若干の柱穴が存在したが、溝に伴うものとはみられない。溝内には、概ね黒色土が堆積していたが、土器片の埋積は少ない。中期中葉とみられる細片が数片あり、この土器から判断する限り中期中葉の可能性が強い。また、7号住居址の長軸方向と一致するのが注意される。

沼遺跡でも同様の溝が尾根を切断するように掘られており、この溝と考え合わせた場合、住居群を区画する機能をもっていたと考えることができよう。沼遺跡の場合、この区画溝外に倉庫が存在することから、単位集団の理解を困難にしてきたが、沼遺跡報告書中のMピットを押入西遺跡例のような建物を構成する柱の1つと考えれば、上記のような疑問は氷解し単位集団の独立性はますます明瞭なものとなろう。

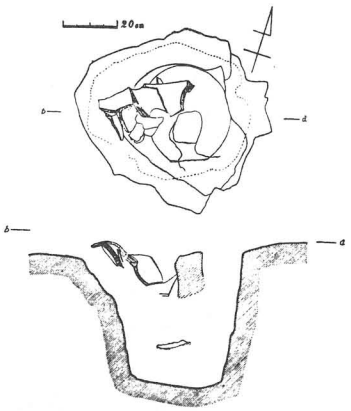


Fig. 27. 沼遺跡発見のMピット
(「津山弥生住居址群の研究」1957)

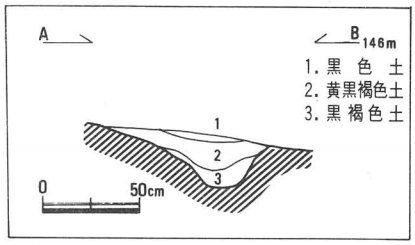


Fig. 26. 溝平面図、断面図(縮尺1:80)

4　墓　址

調査対象地北西約30m、土取り跡断面に存在した。屈削は、10数年前におこなわれたものであるが、沼遺跡取材中の毎日新聞米谷記者が小学生の盗掘現場を発見、連絡を受け弥生時代の墓址であることを確認した。そのまま放置しておくと崩壊、盗掘の恐れもあり54年８月の確認調査にあわせ断面にかかっている遺構のみ調査した。調査面積は約11㎡である。

調査により、木棺墓、土器棺墓、土壙墓を含む墓地であることが判明した。以下、各遺構ごとに記述する。

土器棺墓１

径50～60cmの不整円形の平面形を呈す。南東部は土取りにより削平されている。深さは残存部で約55cmを測る。中からは壺形土器が出土した(Fig. 29-1)。この壺形土器も土取りの際に破壊されており、床面に接した部分だけがかろうじて残存していた。

土器棺墓２

長径約80cm、短径約60cmの楕円形の平面形を呈す。深さは約45cmを測る。中からは口縁部を欠いた壺形土器(Fig. 29-2)を横たえ、脚端部を欠いた高坏形土器(Fig. 29-3)を蓋としてかぶせた状態の壺棺が出土した。壺棺内からは肉眼で観察する限り何も見い出せなかった。

木棺墓

南東部半分は土取り工事により削平をうけているが、長軸約２m、短軸約80cmの平面形を呈すと考えられる。床面までの深さは約55cm、小口間の距離は約1.3mを測る。小口板掘り方は約55×20cmの方形を呈し、深さは約30cmを測る。これらのことから木棺の大きさは幅約50cm、長さ約1.3m、高さ約50cm前後と推定することができよう。

土壙墓

壺棺墓２の北側に接するような状態で検出された。南東部の立ち上がり部が削平をうけている。平面形は楕円形を呈し、長径約80cm、短径約65cmを測る。深さは約15cmと非常に浅く、皿状の断面形を呈す。遺物は出土しなかった。周辺の状況から判断し、土壙墓と考えたい。

Pit１・２

いずれも南東部半分を削平されている。深さはPit１が約30cm、Pit２が約20cmである。遺物は出土しなかった。性格は不明である。

出土遺物　１、２は壺形土器、３は高坏形土器で、２と３が土器棺としてセットで用いられていた。１は、赤褐色を呈し器壁の荒れが著しい。外面には、かすかにタテ方向の刷毛目を残し、内面はナデ仕上げと思われるが不明瞭である。１～３mmの砂粒を多く含む。２は、赤褐色を呈す。保存状態は良好である。頸部にタテ方向の荒い刷毛を施し、数条の沈線を巡らす。胴部は、細い刷毛仕上げ、下半はタテ方向のヘラ磨きが加えられている。底面には荒い刷毛の

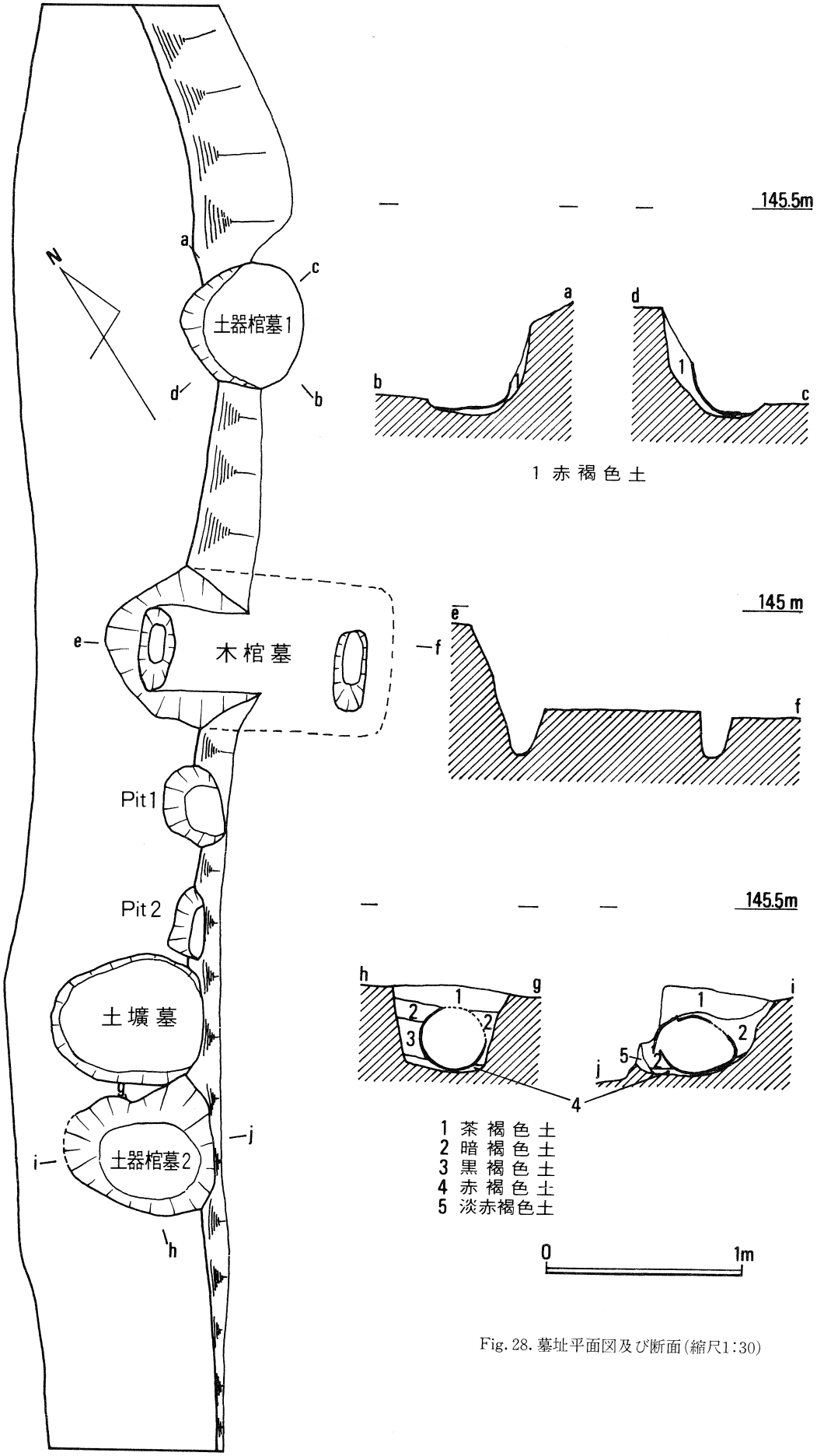


Fig. 28. 墓址平面図及び断面(縮尺1:30)

痕跡を残している。内面上半はナデ仕上げ、下半は刷毛調整ののちヘラ削りが加えられている。頸部は打ち欠かれ口縁部を失っている。3は、坏立ち上がり部外面に凹線風の明瞭な段を残し拡張した端面には3～4条の凹線文が巡る。受部から脚部外面は、タテ方向のヘラ磨き、坏部内面は、井げた状にヘラ磨きが加えられている。円盤充填法で坏部を閉じており、脚部内面はヘラ削りが加えられている。1は中期、2、3は後期初頭に位置づけられよう。

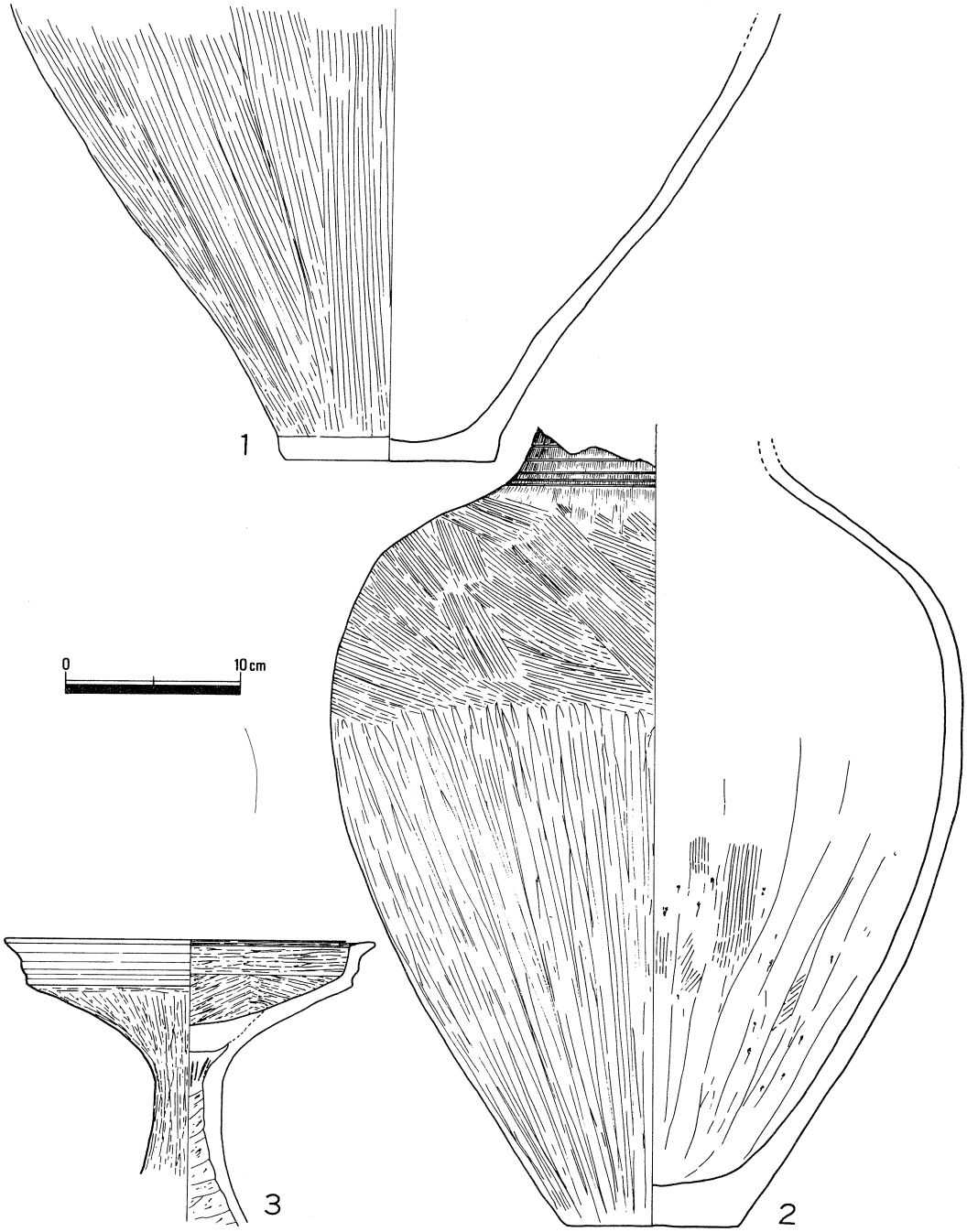


Fig. 29. 墓址出土の土器(縮尺1:4)

5　石　器

小型扁平両刃石器(Fig. 30)

1は1号住居址埋土より出土した。小型の扁平礫を素材とし、表裏両面からの研磨により鋭角な刃部を作出している。刃部には刃こぼれ痕がみられる。研磨は刃部以外に、表裏両面の高い部分にも及んでいる。厚さ0.6cm、幅2.5cmを測る。

2は4号住居址埋土より出土した。小型の扁平礫を素材としている。研磨は表裏両面、全周に及んでいる。刃部は表裏両面から研磨により作出されているが、刃部端は全周の研磨により平坦な面を形成している。このことから、刃部としての機能は果たすことができないと考えられる。長さ3.2cm、幅1.5cm、厚さ0.5cmを測る。1は結晶片岩、2は白雲母片岩である。

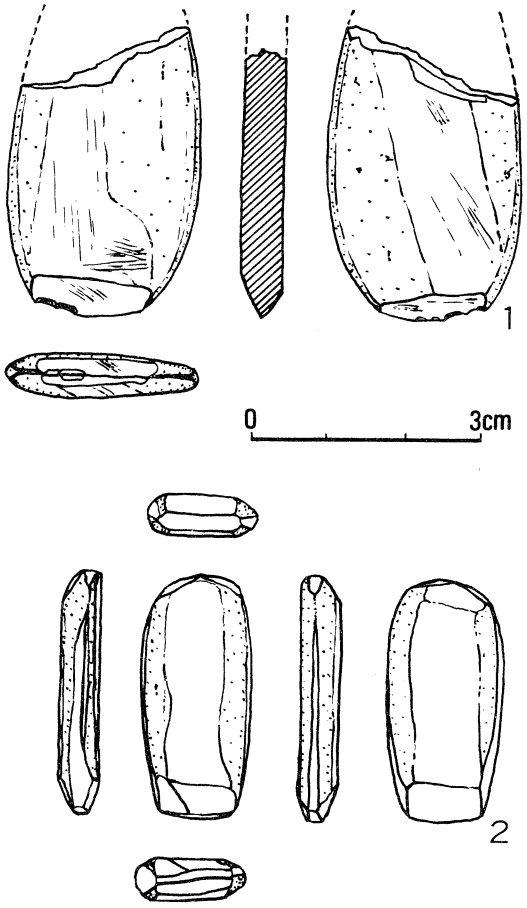


Fig. 30. 石器実測図(1)(縮尺1:1)

叩き石(Fig. 31-7)

5号住居址埋土より出土した。角柱状の礫を素材とし、下端一角を打点として使用している。敲打によって生じた剝離痕が残っている。長さ12.4cm、幅3.8cm、厚さ3.6cmを測る。石質は玢岩である。

石庖丁(Fig. 31-5.6.8.9)

5、6は4号住居址、8は溝、9は3号住居址埋土より出土した。5は長さ13cm、幅 4.2cm、厚さ0.9cmを測る。6は長さ12.6cm、幅5.6cm、厚さ0.8cmを測る。いずれも研磨により鋭角に刃部が作り出されている。表裏両面ともていねいに研磨されている。8は節理面にそって割れた破片である。9は未製品である。表裏両面の最頂部はていねいに研磨されている。長さ12.5cm、幅4cm、厚さ1.3cmを測る。石質は5が緑色片岩、6、9が白雲母石英片岩、8が粘板岩である。

その他の石器(Fig. 31-1～4)

1は7号長方形竪穴住居状遺構、2は1号住居址、3は4号住居址、4は8号住居址埋土より出土した。1は横長の剝片をそのまま石器として使用したもので、わずかに使用による刃こぼれが観察される。2は安山岩の石核である。3、4は不定形剝片を素材とした掻器である。

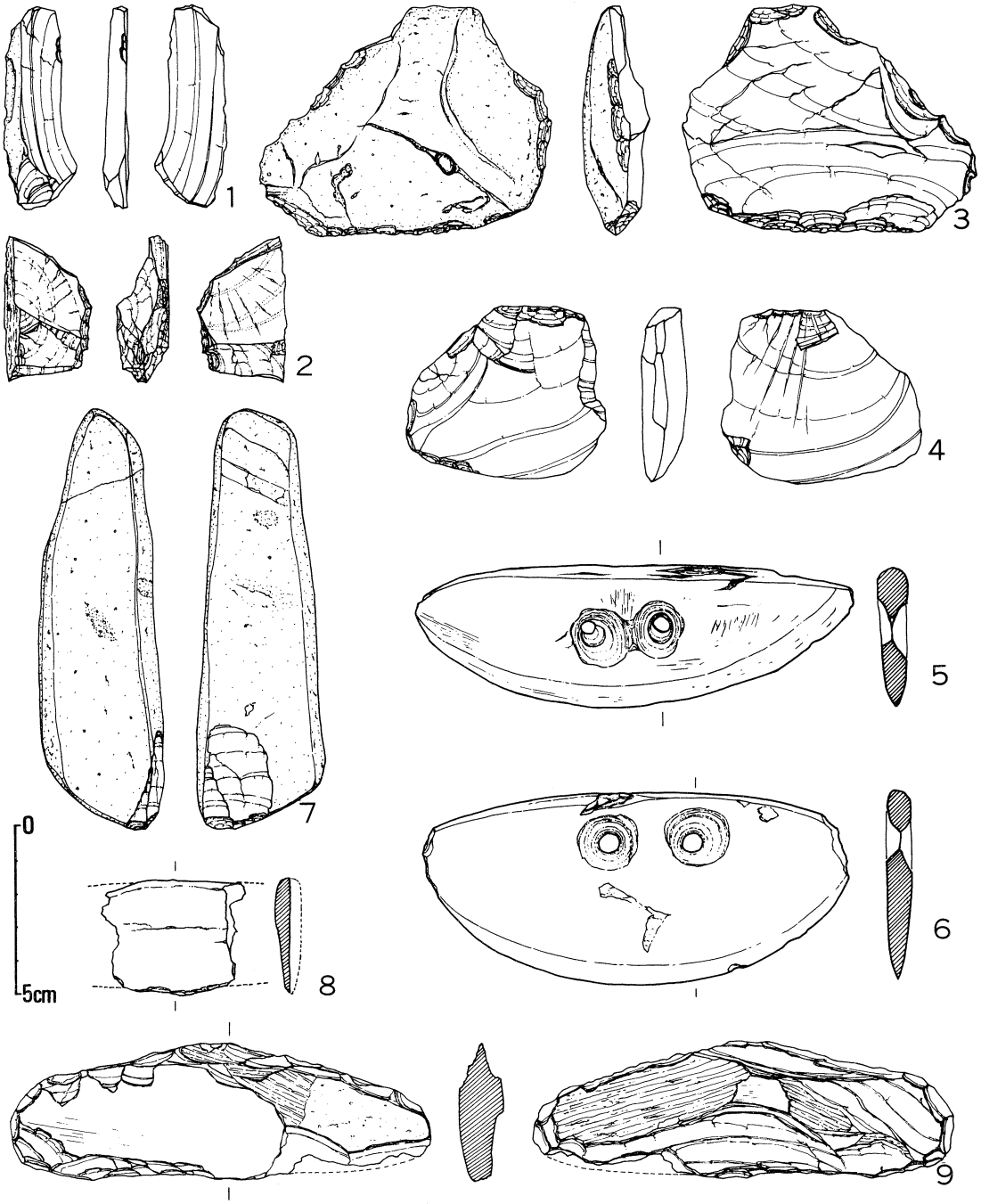


Fig. 31. 石器実測図(2)(縮尺1:2)

3は、表裏両面から細かい剥離を連続的に施し、刃部を作出している。4は裏面から小剥離を施している。刃部作出のための剥離ではなく、使用による刃こぼれと考えられる。石質は1が粘板岩、3が蛇紋岩、4が凝灰岩である。

第４章　若干の考察

―美作における弥生時代中期小住居群構造の解明にむけて―

１　小住居群を構成する遺構の検討

沼遺跡の発掘調査以後、特に近年、弥生時代中期の集落遺跡が多数発掘調査されてきた。この結果、近藤義郎によって提唱された「単位集団」（文献１）を再検討する良好な資料が蓄積されてきた。沼Ｅ遺跡も、そのうちの一つに数えあげることができよう。本項では、沼Ｅ遺跡の発掘成果をふまえ、これら多くの資料に若干の整理を試みてみようと思う。

中期の住居群を構成する遺構は、大ざっぱには以下のように５分類することが可能なように思われる。

A．通常住居址
- イ．大型住居
- ロ．普通寸法の住居
- ハ．小型住居

B．長方形竪穴住居状遺構
- イ．やや小型で床面に柱穴を持たないもの。
- ロ．大型で建物状の柱穴配置を示し炉は棟通り中央からどちらかにずれるもの。

C．高床倉庫址
- イ．１間×１間で構成される小型のもの。
- ロ．２間以上で構成される大型のもの。

D．付属施設址
- イ．区 画 溝
- ロ．段状遺構
- ハ．そ の 他

E．墓　　址
- イ．木 棺 墓
- ロ．土 壙 墓
- ハ．土器棺墓

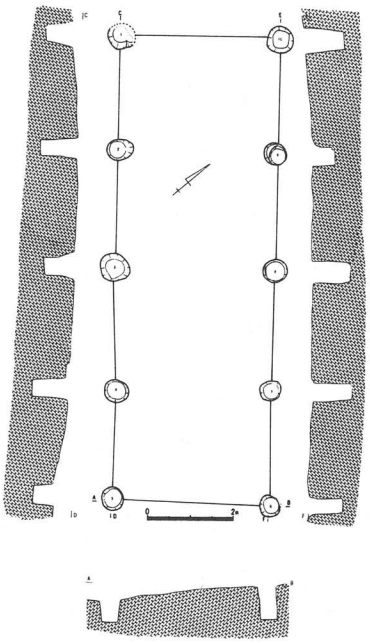


Fig. 32. 押入西遺跡建物Ⅱ（文献２）

Ａの通常住居の３区分は、小住居群中における住居規模の相対的な区分であって、現状では客観的な基準をともなっていない。ここでは、便宜上大型住居は径７ｍ以上のものをさし、小

型住居は１辺ないしは直径概ね４ｍ以下のものを指している。美作の中期小住居群の中には、応々にして大型住居と３ｍ強の小型住居が共存して発見される場合が多く、後期の住居群構成とかなりの差を呈しているようにみえる。ちなみに、紫保井遺跡では大型住居小型住居各１軒にサヌカイト片が密に散布する例があった。通常住居には、必ずイロリとみられる中央穴が備わっており、炉とみられる若干の赤化箇所が床面に認められるものも少なくない。

Ｂの、長方形竪穴住居状遺構はしばしば住居ないしは建物と評価されてきたものであるが、いずれも竪穴式であったことは確実で、壁をもっていたと考えられる。また、住居とまぎらわしい形状を示すものでも、通常住居と認定する基準となる中央穴を備えるものは皆無である。この遺構には一般にきわめて良く焼けた炉があって、床面下数センチまで火をうけて変色しているのが通例である。通常住居の炉とは、視覚的にも明瞭に区別される。床面内に柱をもたない小型のものと、建物状の柱配置を示すやや大型のものに区分できる。沼Ｅ遺跡では、後者の例にともない妻入型の入口とみられる土壇が検出され、炉は奥に存在した。イとロでは、機能上の差を考慮することも可能なように思われるが、現状では必ずしもそれを考える根拠はない。本来中期小住居群に少なくとも１つは備わっていたとみられ、住居群配置の中でも、象徴的位置に存在するものがあるとみられる。火をたくことが本来の機能にかかわった建物と考えられよう。作業場とする意見も多いが、作業内容と炉を結びつけられていない難点がある。

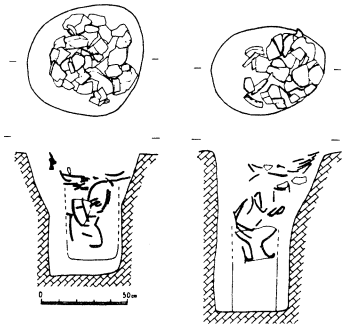


Fig. 33.
押入西遺跡建物Ⅱ柱穴断面図
（文献２）

Ｃの高床倉庫とは、通常掘立柱建物として発見されるものである。１間×１間の小型のものと、２間以上で構成される大型のものと、その規模には大きなバリエーションがある。掘立柱建物即倉庫と認めることはできないが、移築に際し柱抜取穴に破砕土器が投げ入れられている例も多く（Fig. 33）掘立柱建物の多くは穀倉であろうと思われる。

Ｄの付属施設には、区画溝や段状遺構及び掘立柱建物等があるが、性格不明のものも多い。

Ｅの墓址には、木棺墓、土壙墓、土器棺墓等があり、発掘例は多くない。中期から後期初頭にかけての墓址の発掘例としては、沼Ｅ遺跡の他、京免遺跡、竹ノ下遺跡の３箇所程度しか付近にはない。この３例からみる限り、すでに木棺墓がかなり普及していたことがうかがわれる。全体像をおしはかるには資料が限定されすぎているが、住居群に近接していること、後期のものに較べ小規模である点を一般的傾向とみることができよう。

2　中期小住居群の構造について

中期小住居群は、以上概述した諸遺構の総体としてほぼ発見される。これらの事実をみただ

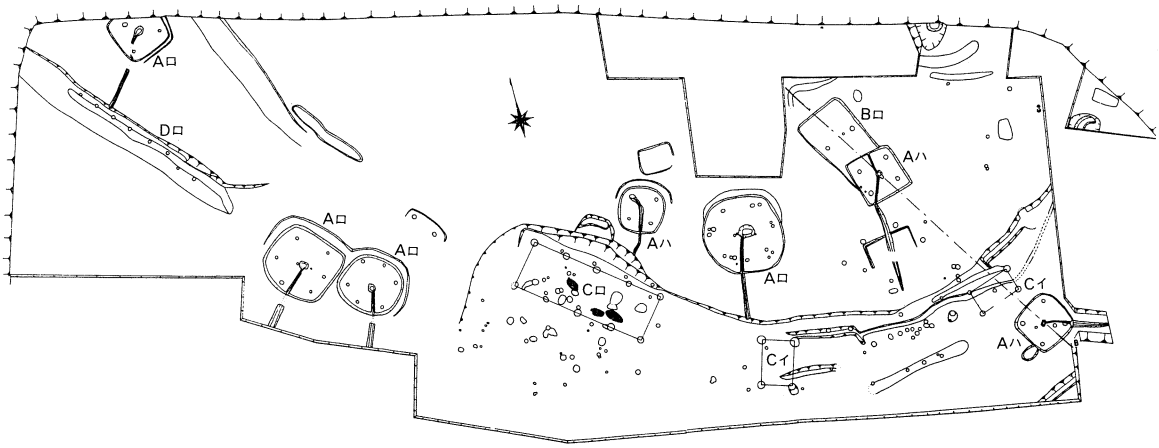


Fig. 34. 押入西遺跡遺構配置図(縮尺1:600)文献 2

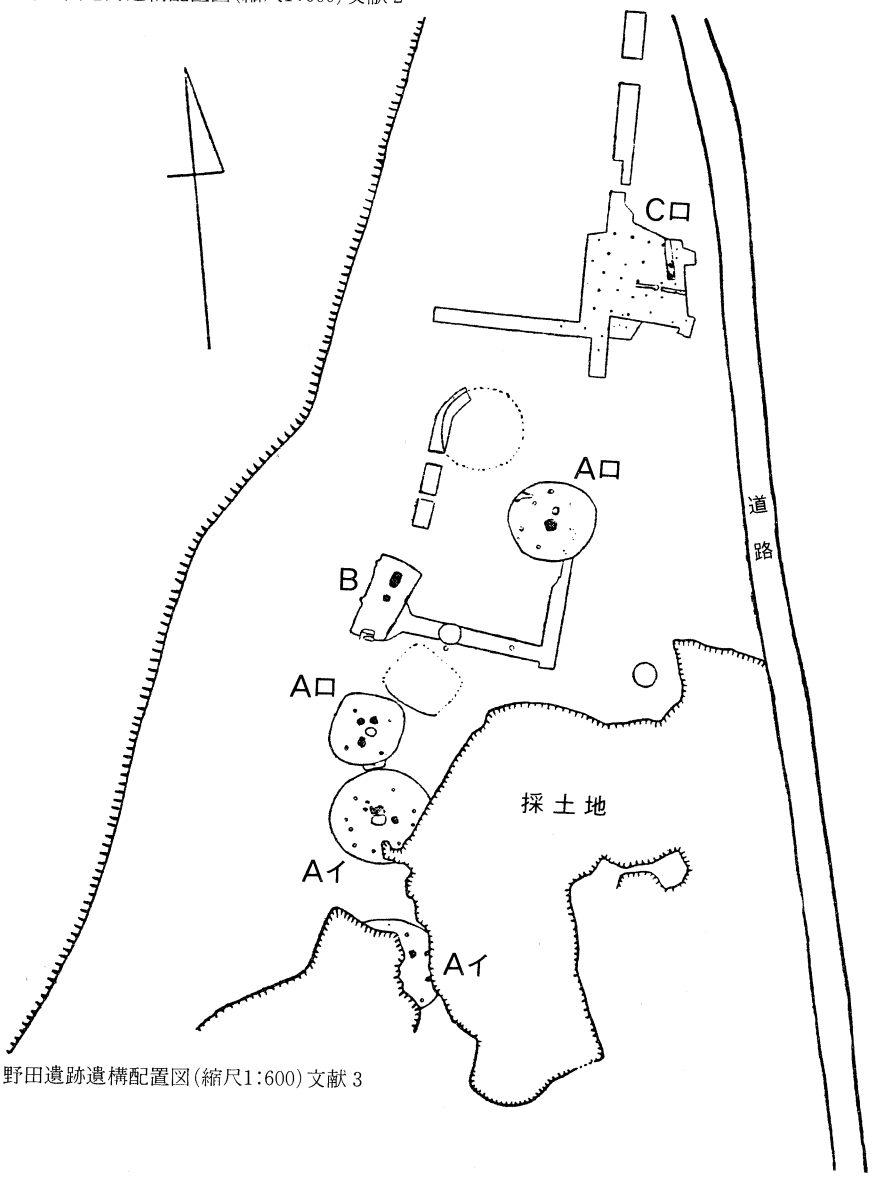


Fig. 35. 野田遺跡遺構配置図(縮尺1:600)文献 3

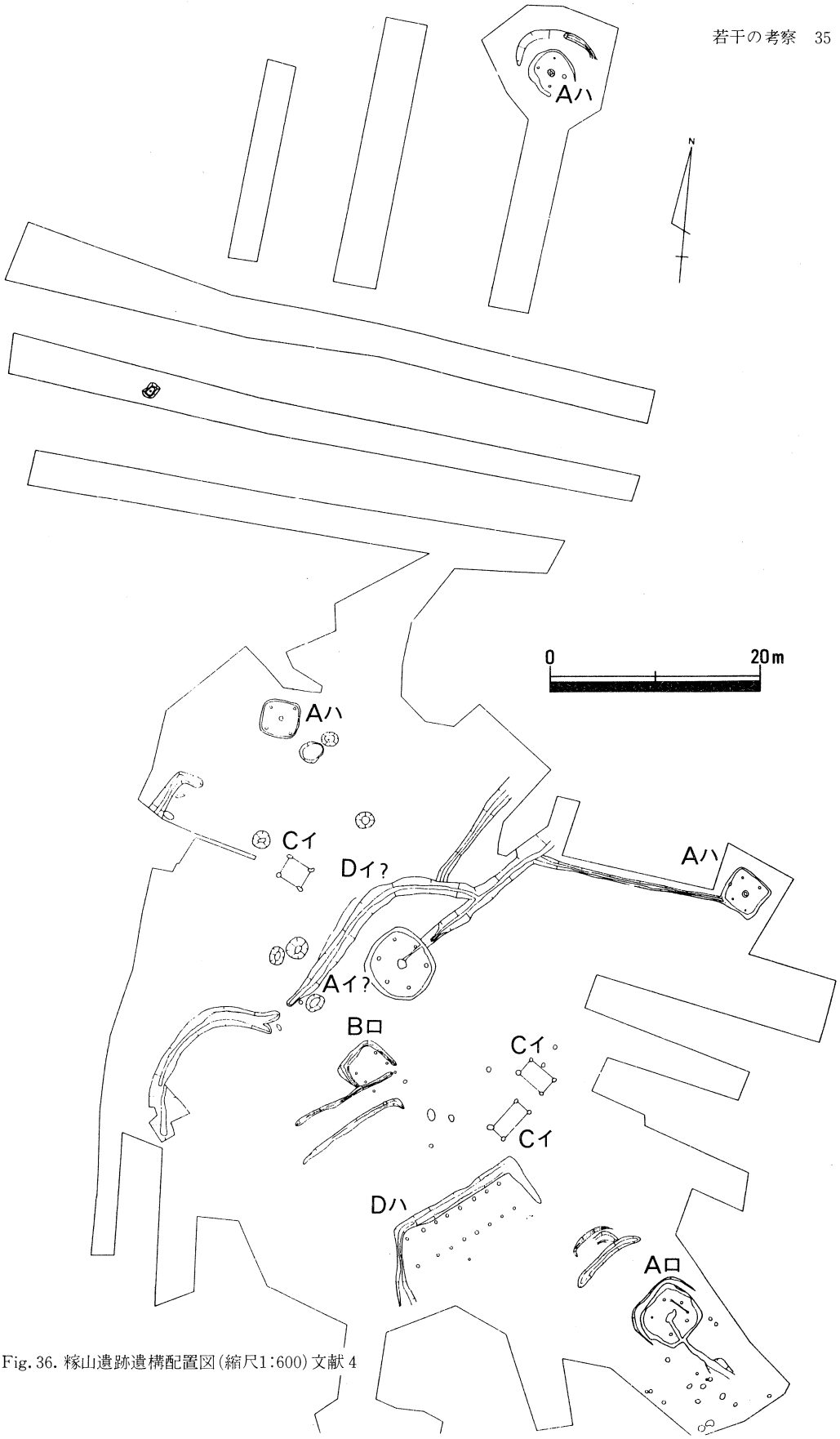


Fig. 36. 糠山遺跡遺構配置図(縮尺1:600)文献4

けでも、これら小住居群は相当独立性の高い統一体としてあることは理解できよう。これら小住居群の形成と分解過程については、「大田十二社遺跡」の報告書でまとめてあるので参照されたい。ここでは、「単位集団」の出発点になった沼遺跡(文献５)の再検討からこれら小住居群の実体を再考したい。

沼遺跡の評価で、もっとも理解を困難にしたのは、区画溝外に高床倉庫が存在する点である。(文献６)しかし、近年の調査例では、ほとんど小住居群域に倉庫が併設されており、この点沼遺跡発見のＭピット(Fig. 27)を倉庫にあてれば理解は容易となる。東地区に存在する倉庫址もまた、弥生時代中期のものと考えられるので、この点東地区にも一小住居群がかつて存在したことを考えれば、溝の性格もいよいよ鮮明となろう。作業場ないしは物置と考えられた長方形のＫ竪穴址類似遺構は、近年多数発掘例があり、これらからみてもＫ竪穴は長方形竪穴住居状遺構(Ｂ)に分類して誤りはなさそうである。Ｋ遺構は、炉もなく柱穴も認められていないが、遺構Ｂ種は、火炊き場として使用された建物であることは確実で、物置、作業場とするのは不適切なように考えられる。もっとも可能な機能推定は、炊事小屋とすることと考える。しかしこのことは必ずしも個々竪穴で炊事がおこなわれなかったとすることではない。

以上概述した機能推定に誤りがないとすれば、これら小住居群の実体を次のように推測することができる。

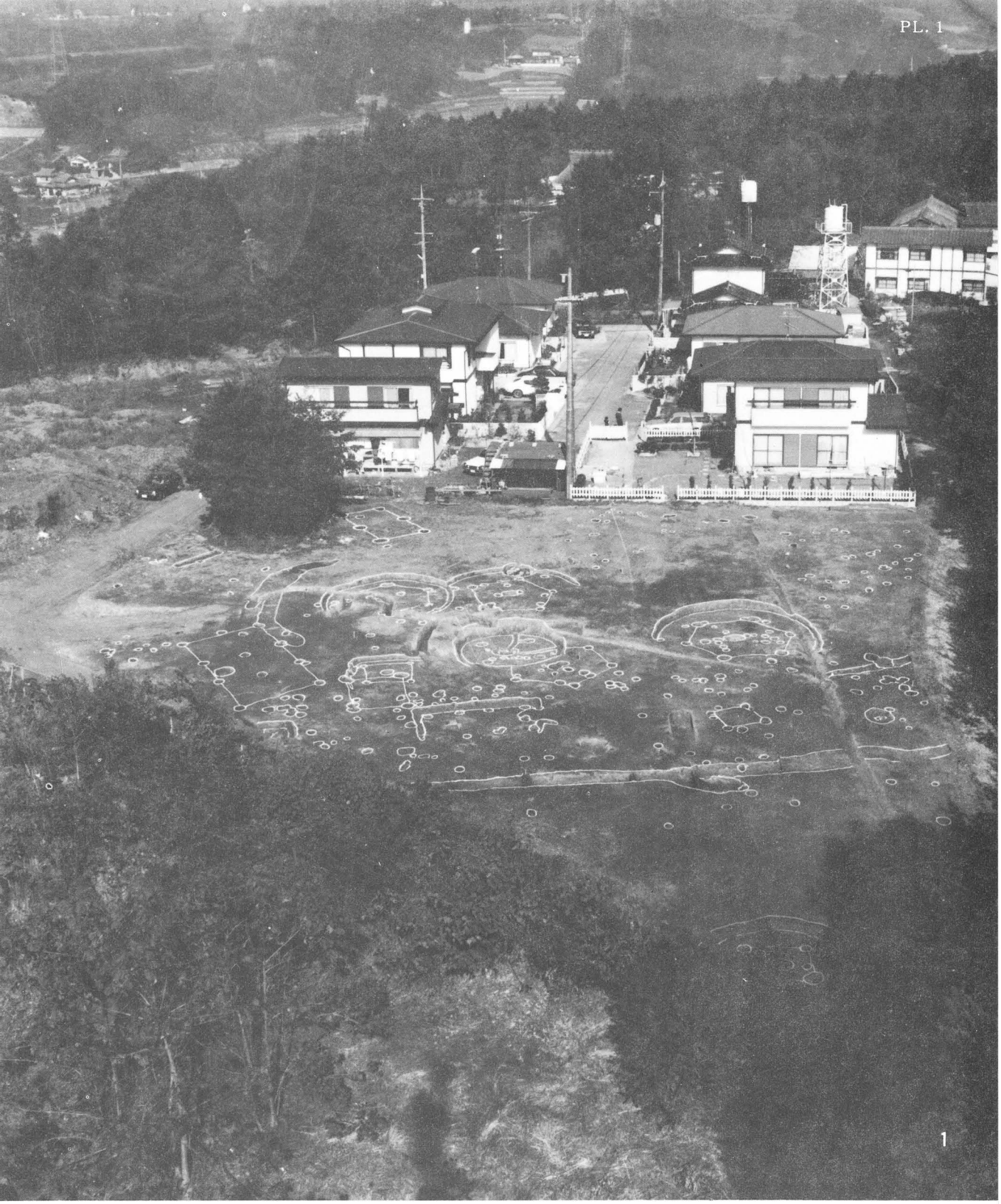
これら小住居群には、居住区画があり、穀倉があり、共同の炊事小屋があり、墓地が付設される。その構成員は共食の単位であり、宅地占取、従って水田経営の単位であり、また財産の共有単位である。墓群のあり方は、家族関係のきずなを語りかけ、各小住居群の規模は、水田開拓期初期にあらわれた兄弟関係に基礎をおく独立性の強い、いわゆる「大家族」を彷彿させると。

遺構種別 / 遺跡名	通常住居址			長方形竪穴住居状遺構		高床倉庫址		付属施設址			墓　　址		
	イ	ロ	ハ	イ	ロ	イ	ロ	イ	ロ	ハ	イ	ロ	ハ
沼Ｅ遺跡	○	○	○	○	○	○	○	○			○	○	○
沼　遺　跡	○	○	○		○?	○	○	○					
紫保井遺跡	○	○	○		○		○						
押入西遺跡		○	○		○?	○	○		○				
糠山遺跡	○?	○	○		○		○	○?	○				
野田遺跡	○	○		○ ? ○			○						

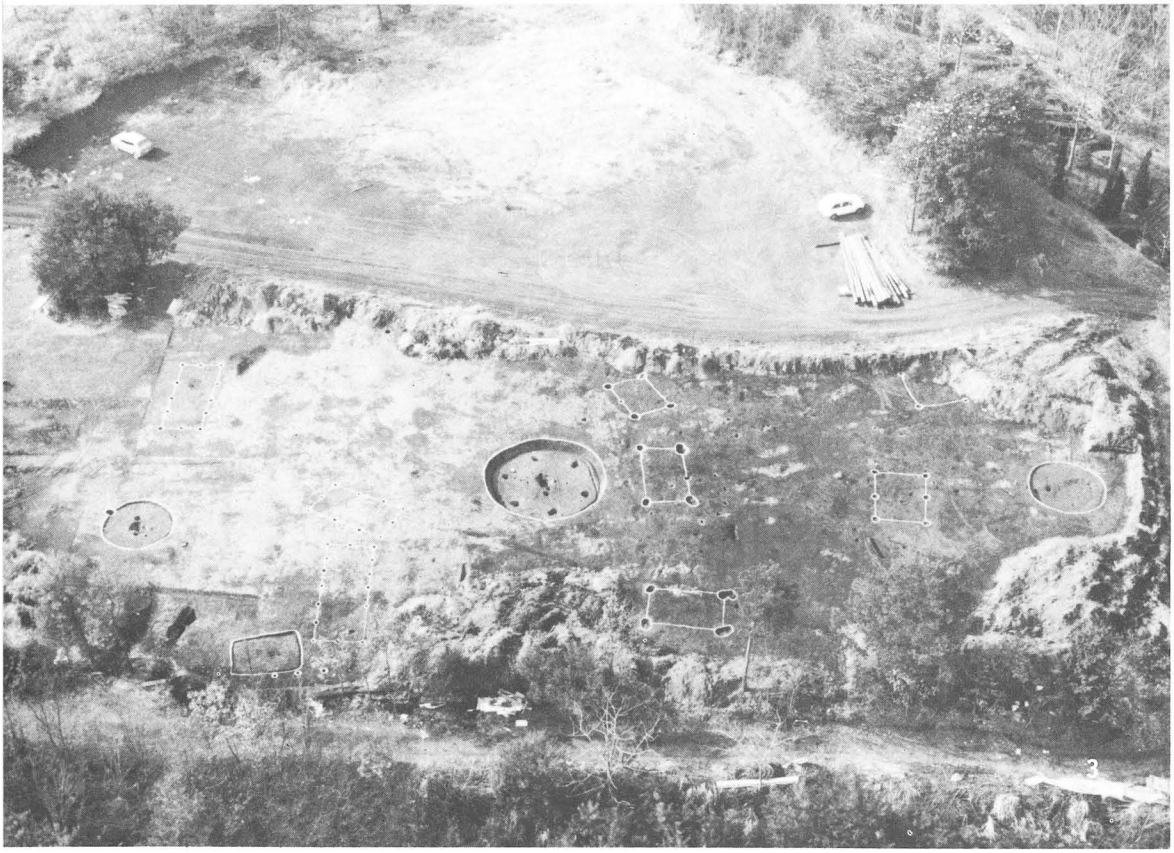
表２

文献
1. 近藤義郎「共同体と単位集団」考古学研究第６巻１号　1959
2. 井上弘・下沢公明・橋本惣司・柳瀬昭彦「押入西遺跡」岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3 岡山県教育委員会 1973
3. 浅野正・高村継夫・西山薫「北吉野村史」北吉野村史編纂会　1956
4. 村上幸雄・橋本惣司「糠山遺跡Ⅰ」久米開発事業に伴う文化財調査委員会　1979
5. 近藤義郎・渋谷泰彦編「津山弥生住居址群の研究」津山市津山郷土館　1957
6. 近藤義郎「弥生文化論」岩波講座日本歴史　1962

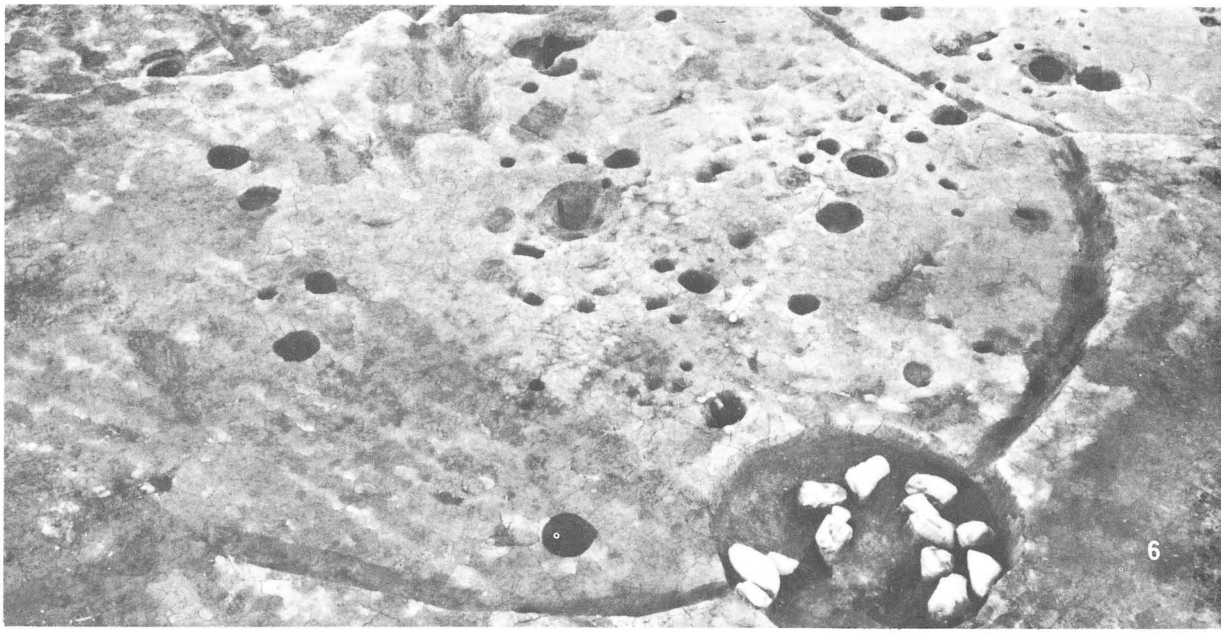
図　版



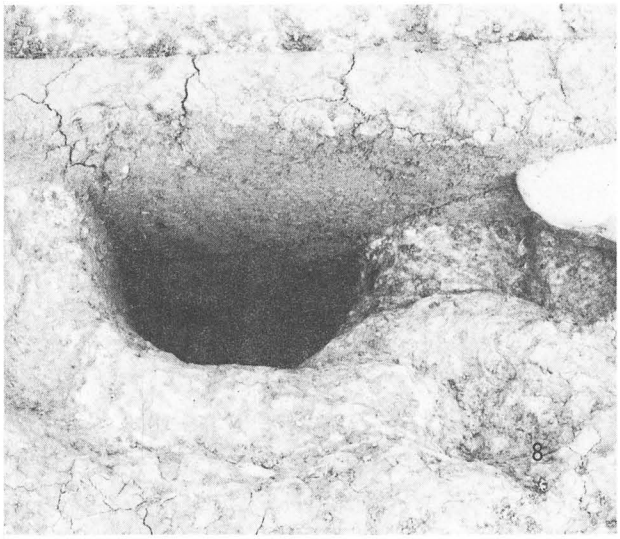
1. 全景写真

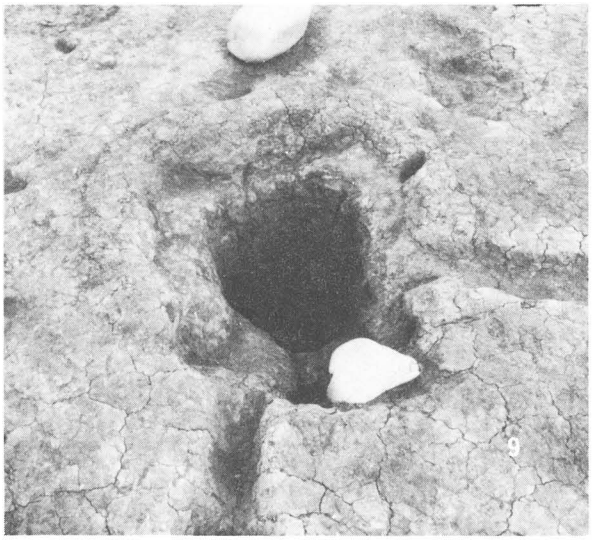


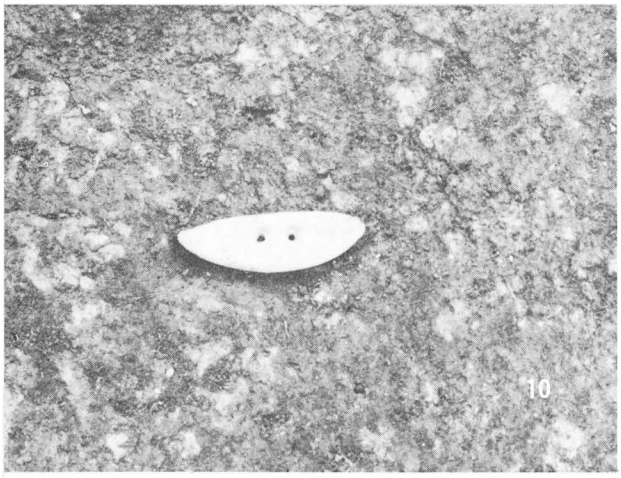
2. 調査前　3. 第1次調査航空写真

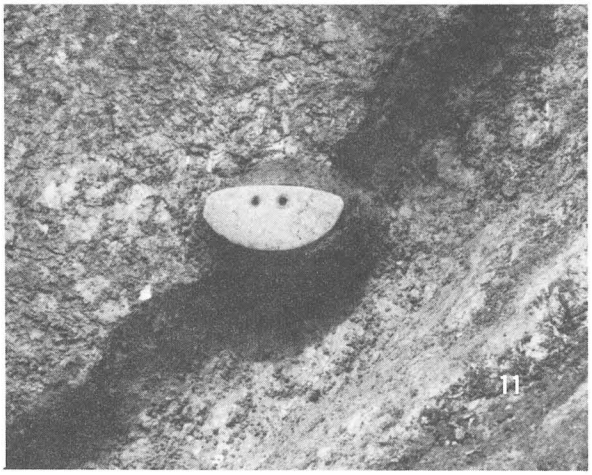


4. 1 号住居　5. 2 号住居　6. 3 号住居

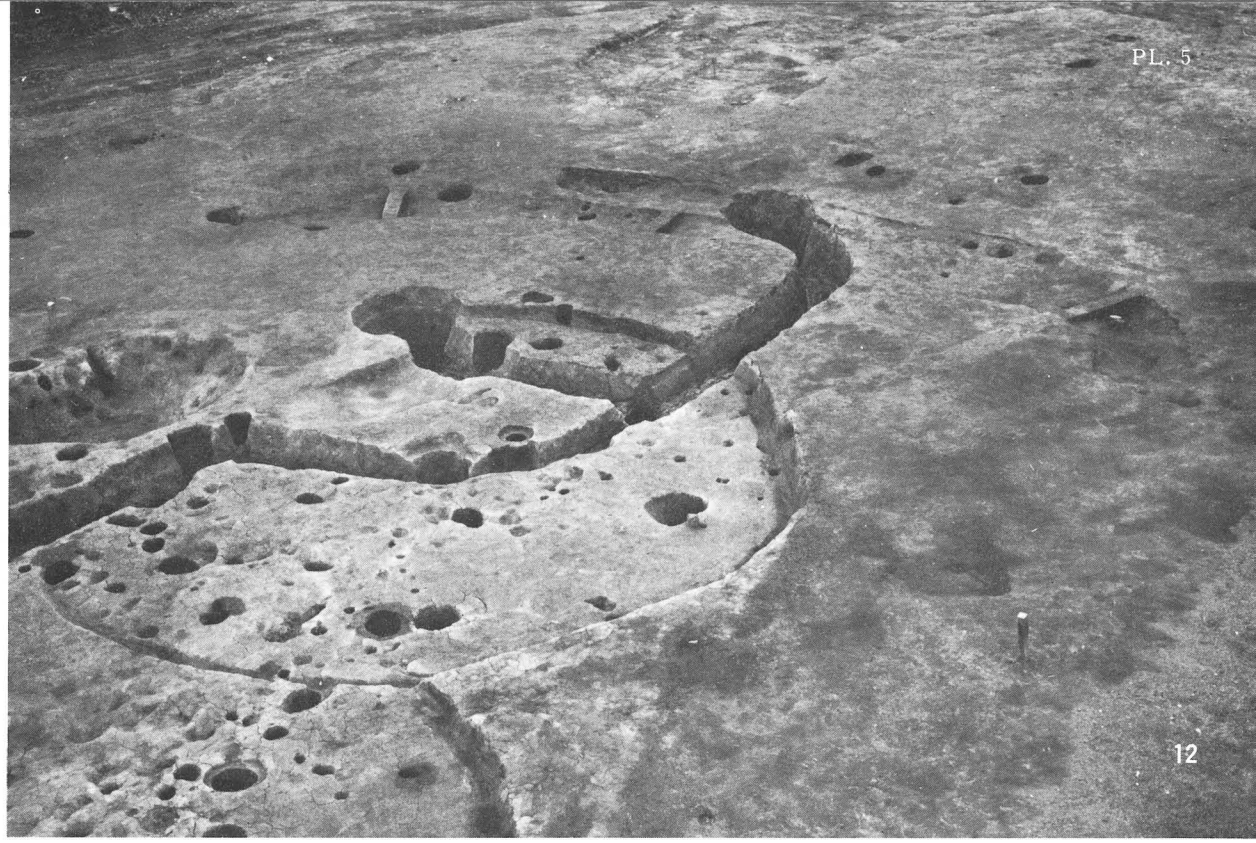


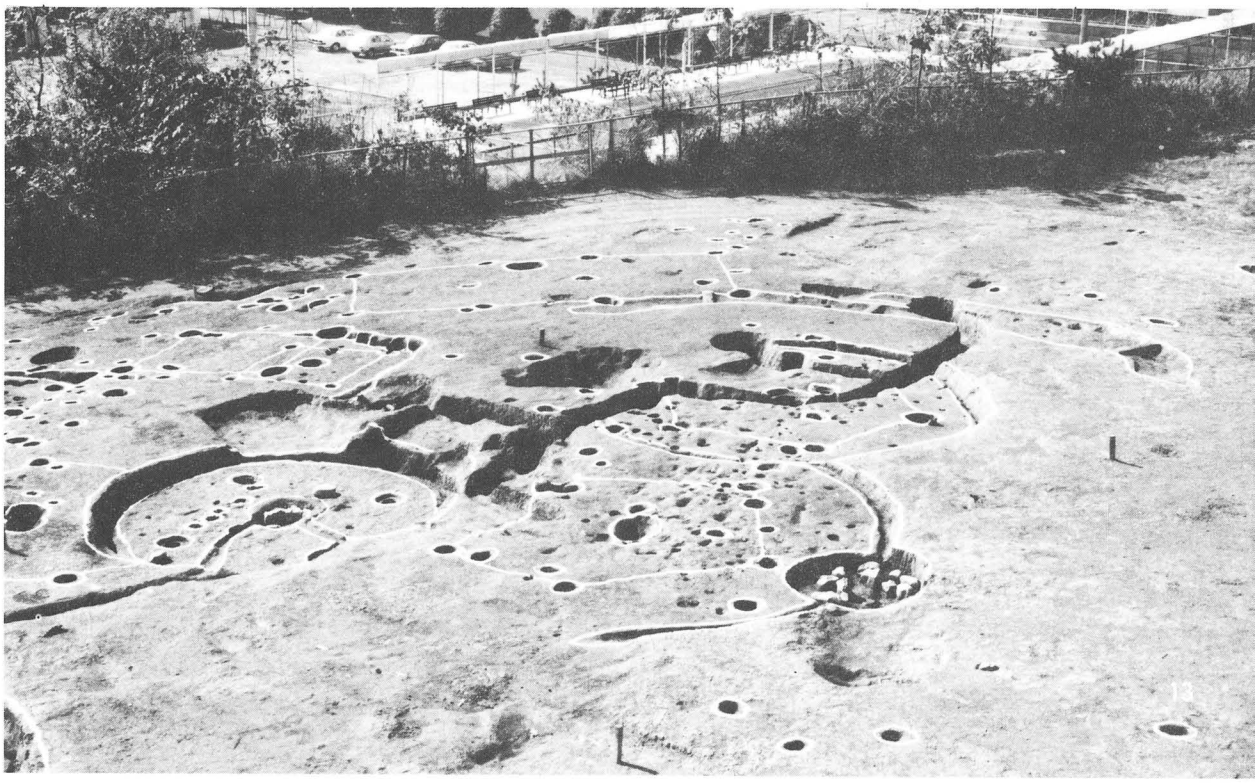




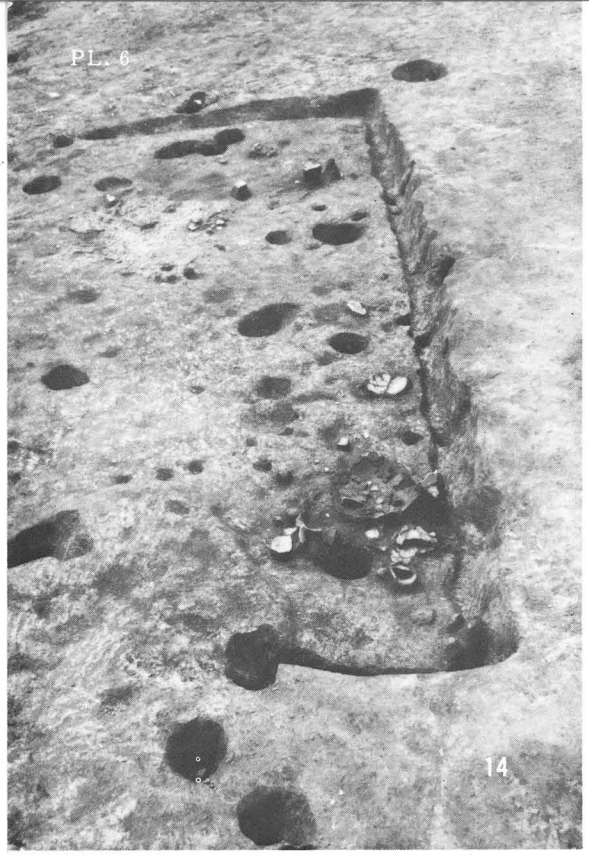


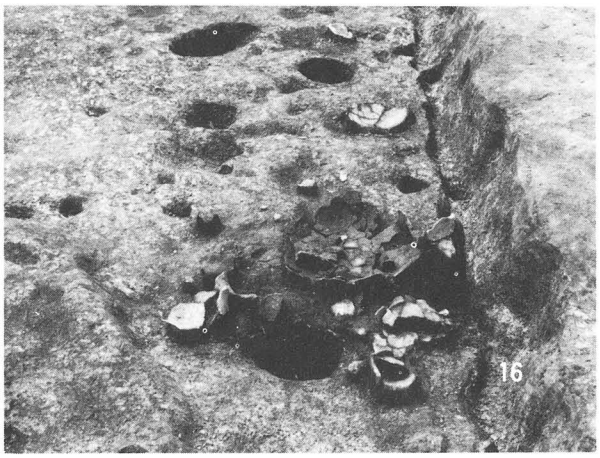
7. 4 号住居　8. 9. 4 号住居中央穴　10. 11. 4 号住居石庖丁出土状況



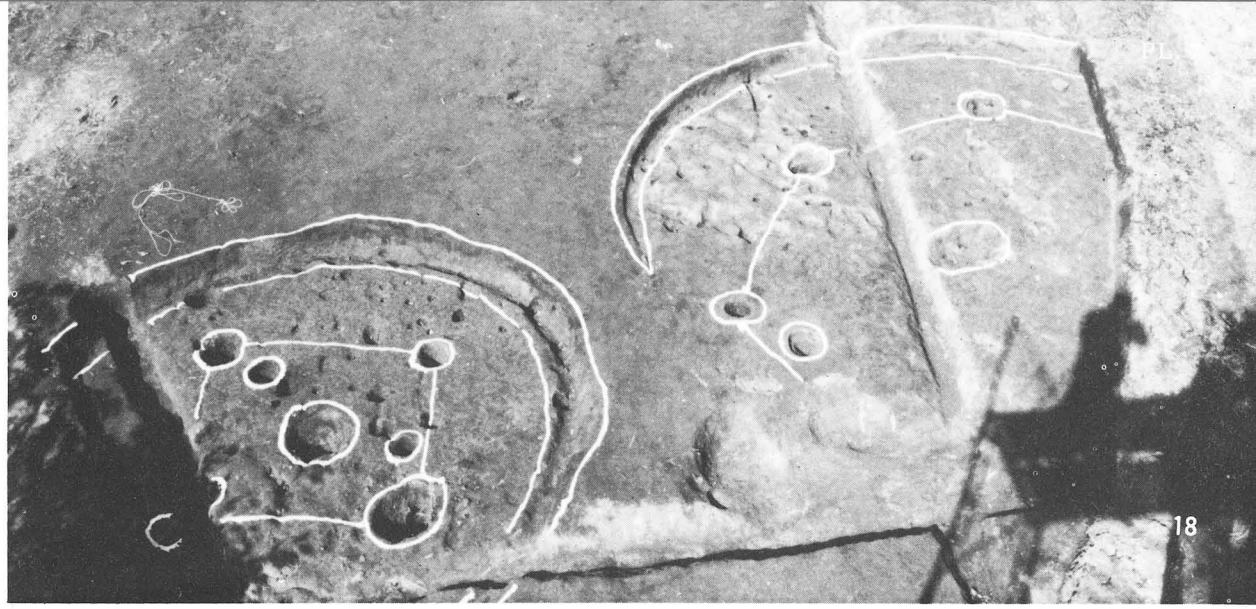


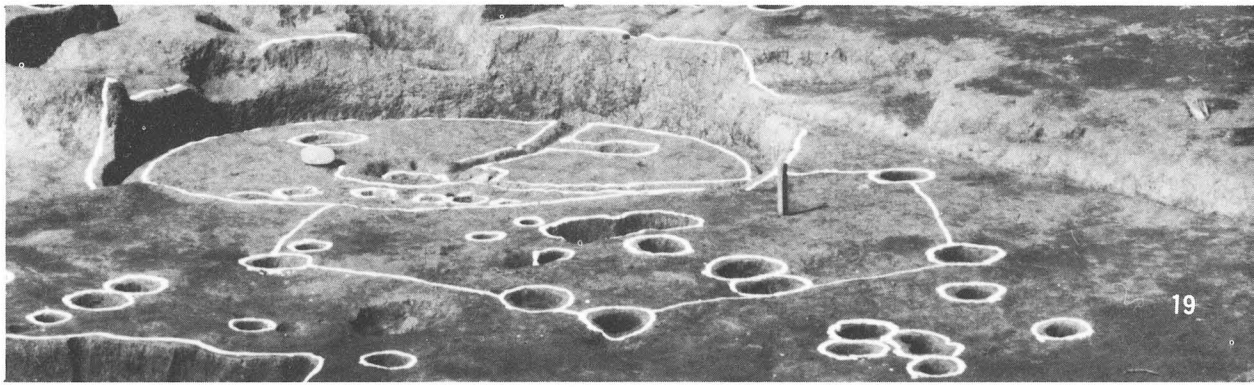
12. 5号住居　13. 南西部遠景写真

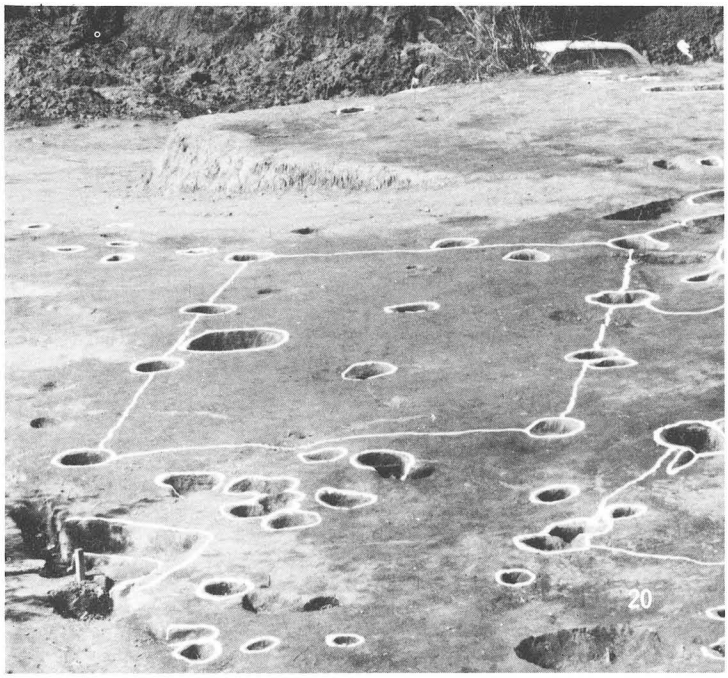


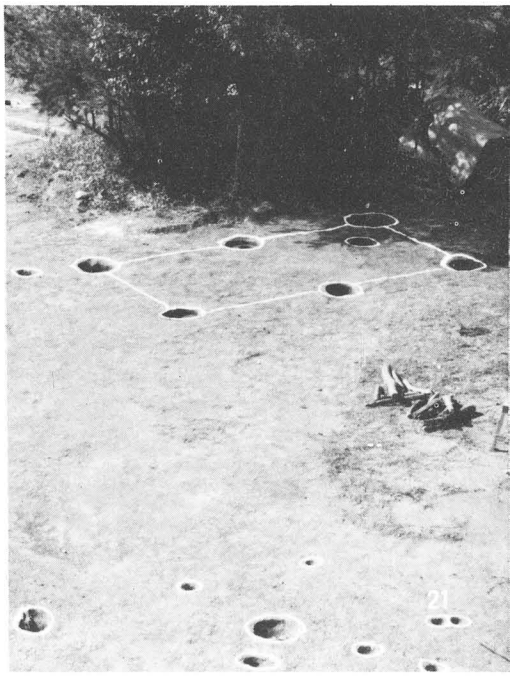


14.17. 7号長方形竪穴住居状遺構　15.16. 7号遺構土器出土状況

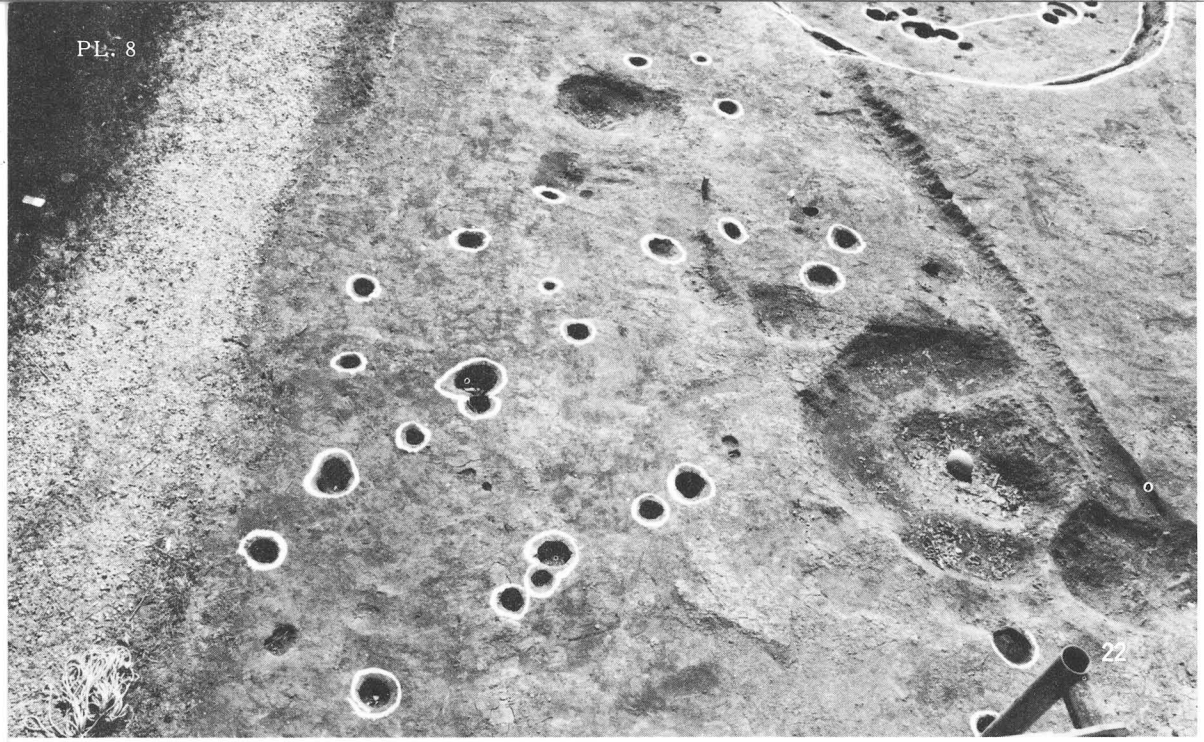


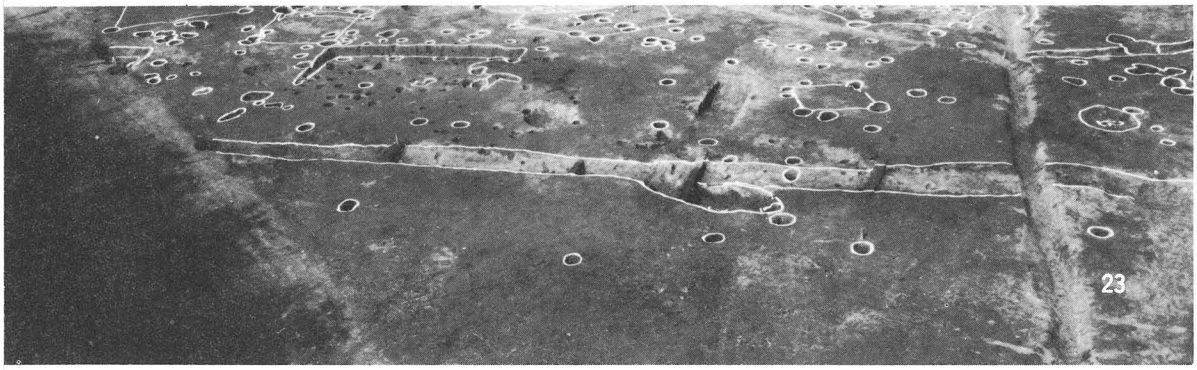




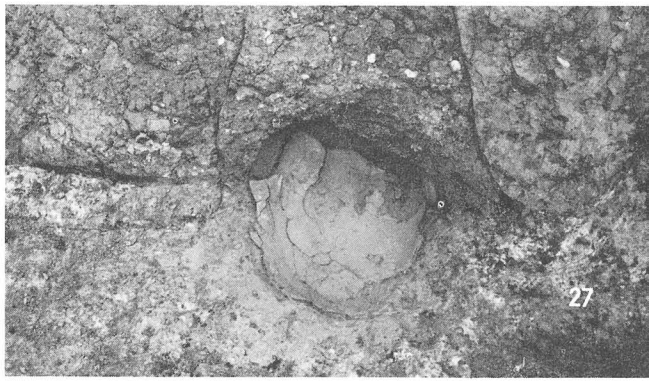


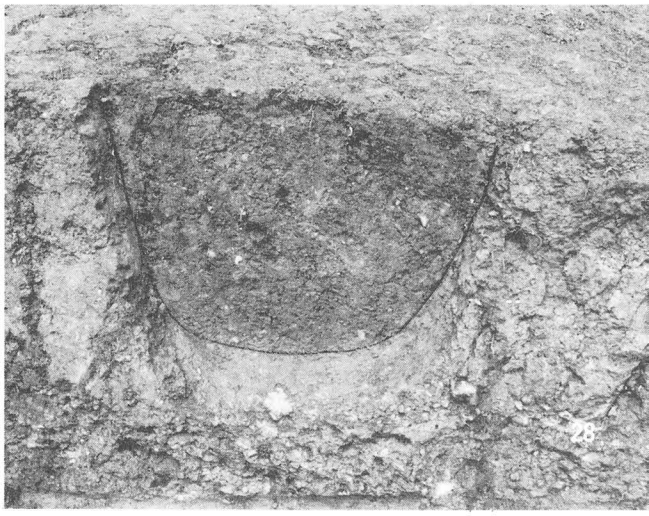
18. 8・9号住居址　19. 11号住居　20. 建物Ⅱ　21. 建物Ⅰ





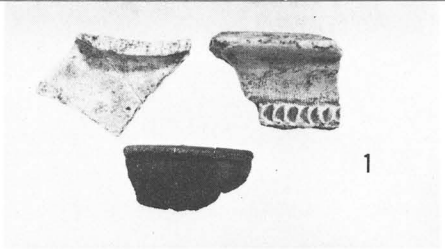
22. 1B グリッド付近柱穴群　23. 溝　24. 溝土層断面

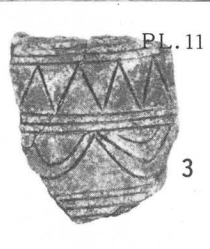


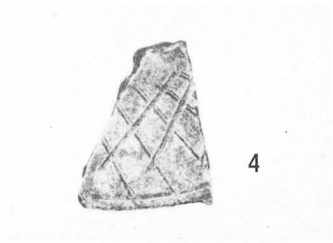


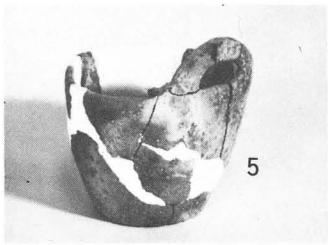
25. 墓址　26. 木棺墓　27. 土器棺墓1　28. ピット1

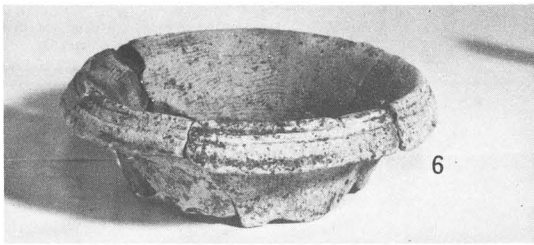
29. 30. 土器棺墓 2

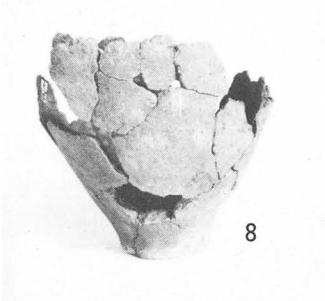


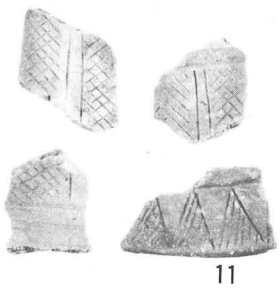


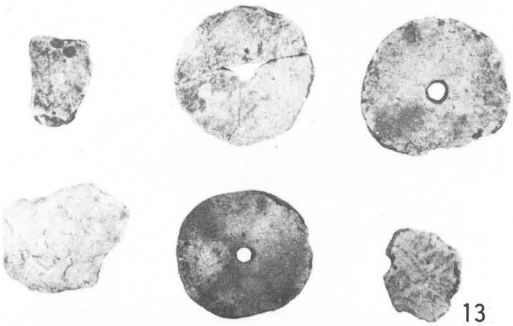


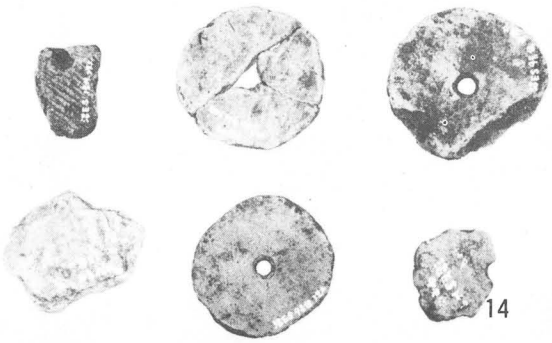






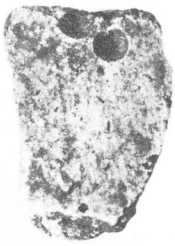






1.2. 1号住居出土の土器　3. 1号住居攪乱層中の土器　4. 3号住居出土の土器
5.6. 4号住居出土の土器　7～9. 7号長方形竪穴住居状遺構出土の土器　10. 1号住居出土の土器
11.12. 9号住居出土の土器　13. 紡錘車表面　14. 紡錘車裏面

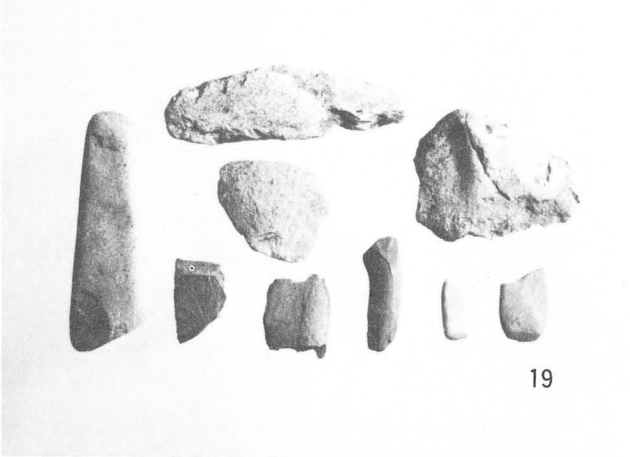
16



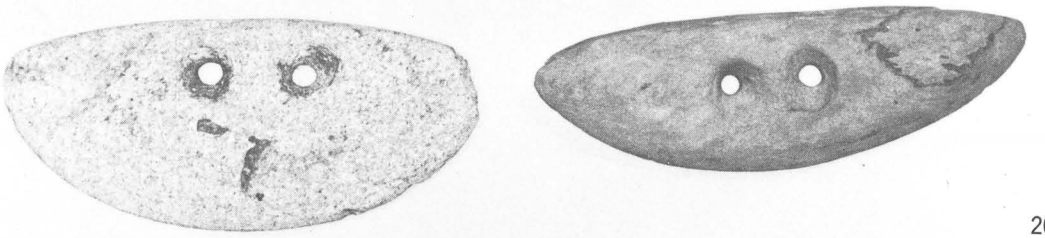
15

18

17



19



20

15. 紡錘車穿孔部拡大　16～18. 墓址出土の土器　19. 石器　20. 石庖丁

津山市沼字松山

沼 E 遺 跡

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第 8 集

1981年3月31日

発行　津 山 市 教 育 委 員 会
津山市山下97の 1

印刷　津山朝日新聞社印刷部
津山市田町13